
魔法少女リリカルなのは StS ～ 白い甲冑が往く ～

もりもり太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは S t S ー 白い甲冑が往くー

【Nコード】

N 2 2 7 1 L

【作者名】

もりもり太郎

【あらすじ】

小学三年のクリスマスに、家宝の宝玉と憑依合身！ 俺爆誕！
してしまった織部まもる少年。強制寝正月を経て、春休みが終わる頃にはすっかり体調は元に戻っていたのだが、それから光る玉とかごんぶとビームとかが見えちゃうようになってしまう。このまま「靈感少年ドリトルまもる」でも始まってしまおうかと思いきや、中の春に「自称」魔法少女達と遭遇してさあ大変。美少女ながらどこかぶっ飛んだ思考展開する彼女達に振り回され、最終的に謎の組織に引き込まれてしまった！ 織部まもるの明日はどっちだ！？

「こ

っちなの」「こっちだよ」「こっちやで」

「そっちには行きたくないッス」

オリ主微チート、魔法
少女アンチ、管理局改変、捏造設定が含まれます。それでも良いと
いうお方はこのままお進みください。
追記：すったもんだで更新凍結中

01 陰謀から始まるサクセスストーリー（前書き）

寝不足の勢いで書き始めた。
はじめのほうの記憶がない。

01 陰謀から始まるサクセスストーリー

「まもる君も一緒に管理局で働くの！ 世界の平和を守るの！！」

また始まった。

高町なのはによる理想の押し付け。何度も何度も同じことの繰り返し。ここまで来ると、もはや洗脳しようとしているのではないかと疑ってしまう。

「なのはの言うとおりだよ。折角力があるのに使わないのは勿体無いよ」

それに便乗する金髪美人、フェイト・T・ハラオウン。

事あるごとに理想^{なのは}バカに同調する、どこかに自分の意思を落っことしてきたと思われるかわいそうな子。

しつこい奴とその腰ぎんちゃくに詰め寄られ、さっさと喫茶店を出ようと伝票に手を伸ばす。すると明細を掴む前に別の誰かの手に遮られ、その手に触れてしまう。

「あつ、触りおったな？ セクハラやでセクハラ！ 訴えられたくなかったら大人しゅう管理局に入りや！」

したり顔の関西弁、八神はやて。

お前もセクハラ三昧の癖に、手がかすっただけで訴えようとするとはどういう見か？ 誰かこの狸の行動原理をレポートに纏めて提出してくれ。個人的に報酬を出すから。

「囑託でもいいからお願いできないかしら」

緑茶に砂糖を瓶一本分入れ、さらにスティックシュガーを何本も入れながら諭すような口調で話しかけてくる年齢不詳の未亡人。自意識薄弱なかわいそうな子ことフェイトの義理の母であるリンディ・ハラウン。全ての黒幕。ものすんごいウザイ。

「そうだぞ。お前の所持しているロストロギアは、封印して持ち帰っても必ずお前の元に転移してしまう。せめて管理局の監視下に居ろ！……はあ、まったく頭が痛い……」

勝手に問題提起して、俺に責任転嫁し、勝手に自己完結しているのは、砂糖リンディの実の息子でありアホの子の義理の兄であるクロノ・ハラウン。

頭が痛いのはコツチだブワーッ力！

こいつは犯罪者だ、俺基準で。罪状は空き巣・窃盗・強盗・脅迫である。なんでもうちの家宝の一つである短刀が「ロストロギア」なるもので時空管理局が回収・管理しなければならぬのだとかよくわからんがそうになっているらしい。ちなみに家宝の短刀は「次元刀」という。「おいで次元刀」というと手元にきてくれるなんとも可愛いらしい短刀だ。

「み、みなさん。もうそれぐらいでよししょうよ。ほら、織部君も困っていますし……」

俺の人格を認めてくれる発言をなさったのがエイミー・リミエツタ嬢。この中でただ一人の癒しであり、もしかしたら俺の初恋になったかもしれない女性。初恋にならなかったのは犯罪者クロノと既に付き合っていたから。エイミーさんの唯一にして最大の汚点だと思う。事実^{事実}に気付きアレと別れたら、たぶん俺とのラブロマンスが始まると思う。いや、是非とも始めたい。

「エイミィさん、お気遣いありがとうございます。では、自分はこの辺でお暇しますので……。土朗さん、お勘定お願いします。」

これは俺、何処にでもいるような日本人。いや、ちょっと標準より体は大きいかな？ でも許容範囲内。名前は織部まもる。今年15歳になる中学三年生だ。他の人と違うのはリンカーコアなるものに家宝の一つである「パラディン」がくつついてるところかな？ 寄生と表現してもいいかもしれない。なにせ小学三年のクリスマスに胸に突っ込んできたからな。ついでに使い方も頭にぶち込んでくれた。凄い頭痛だったよ。

「すまんね、毎回うちの子供達が……」

この人は高町士朗さん。高町家の家長でなんとかかんとか流の武術家らしい。この人も非常に出来た御仁で俺の身元保証人。決して保護者ではない。ちなみに、なぜ「子供達」と複数形なのかと言うと、娘に加えて兄貴の方も俺に迷惑を掛けてくるからだ。ほら、今でもカウンターの隅で皿を洗いながらこっちを凝視してる。うん、ウルトラこえー。シスコン既婚者もなんとかかんとか流を学んでいるらしく、やっかいなことに物理的に仕掛けてくる。初襲撃のときは右腕の骨と肋骨を二本もっていかれた。さすがに強制禁欲生活をさせてしまうことに罪悪感を感じたのか、多めの慰謝料をくれ、さらに完治するまで翠屋のすべての食べ物やタダで提供してくれた。朝晩しっかり頂きました。士朗さん、ウマウマでした。

カランカランとドア付きのベルを鳴らし外に出ようとすると、それに反応するかのように有象無象どもが声をかけてくる。

「まだお話は終わってないの！ 管理局に入るの！」

「そうだよ。なのはの言つとおりだよ」

「ホンマに訴えるで？ ええのんか？」

「囑託でもいいのよ」

「お前を不法所持で逮捕しても良いんだぞ！？」

……ほんとにうぜえ。

「ハイハイ、中学卒業したら考えるよ。じゃーね」

こう言つてしまえば少なくとも卒業するまでの半年強は翠屋で飲み食いしてもぴーちくぱーちくわめかんだろ。卒業しても「考えました。でも入りません」で済むし。でも、この街で進学したら元の木阿弥かなあ……。ああ、そうだ。移住しよう。名古屋辺りに。味噌カツうまいからな。

こうして俺は翠屋を後にした。

この発言で自分の行く末が決まるとも知らずに……。

「――要約すると、『卒業するまで待ってくれ』てことよね」

「そういうことか。これで頭痛の種が消える」

「やったなの！ まもる君と一緒になの！」

「うん、そうだねなのは。まもると一緒にだね」

「クフフ、ウチがしっかりこき使ってやるさかい。楽しみにしててや、まーくん」

01 陰謀から始まるサクセスストーリー（後書き）

ご指摘を受けたので、

「おあいそ」↓「お勘定」に修正。

02 親友と簡単な説明

どうもこんにちわ。人生の舵を他人にきられてしまった不幸な15歳、織部まもるです。現在、ミッドチルダの陸士訓練校から生中継でお送りしております。なぜそんな所にいるかつて？ 簡単に言うと嵌められました。中学の卒業式が終わった瞬間強制連行です。主犯は甘ったるいを通り越して砂糖の固まりな緑茶が主武装のあの年増です。実行犯は高町なんとかとアフォの子と関西弁のセクハラ魔人でしょう。ったく、ご丁寧に家まで売り払いやがって……。ん？ 黒くて誰かの影にいたら気付かないような奴はどうしたって？ うん、死ねばいいと思うよ。あ、エイミ嬢は女神様です。

でもなー。これって拉致なのは確定的に明らかだよな？ 訴えたら勝てるよね？ 行列の出来る法律相談所はどこだ！？ ここは地球ではありません。本当にありがとうございました。

「はあああああああああああああああつ！」

思わずorzの挫折ポーズで盛大なため息。口から魂的な何かが出るんじゃない？ って勢いに周りのクラスメイトはドン引きです。

「だ、大丈夫かまもる？ どこか具合でも悪いのか？」

やさしい対応をしてくれたのはルームメイト兼ここでの初めての知り合い兼親友のティード・ランスターさんです。ちなみに俺の三つ上です。でも呼び捨てで良いらしいのでティードって呼んでます。イケ面なのに幸が薄そうなのでモテない哀れな男です。でもイケ面大事なので二回言いm（ry

「気にしないで良いよティード。この世の俤ならないことに対してのせめてもの抵抗だから」

「そ、そうかい。それよりまもるの希望部署は何処なんだ？」

「そういやさっきの授業は時空管理局の細かい部署と仕事内容だったな。」

「まったく、入学一ヶ月で進路希望とかどっかの有名大学みたいな。」

「んゝ、そうだなあゝ。海はダメだな。休みは定期的に欲しい」

時空管理局次元航行部隊、通称「海」。

主な任務は次元航行艦に搭乗して次元世界をあちに行ったりこちに行ったり。任務期間の都合上、休日が不定期で長期間になる。ロストログアの回収など危険度の高い任務も多いが、その分高給取り。花形部署で人気がある。

ここがダメな最大の理由は緑茶ババアと黒の犯罪者が所属していること。こいつらがいなかったら希望してたかもしれない。

「あゝ、空もダメだな。俺飛べないし」

時空管理局航空武装隊、通称「空」。

空戦適性が絶対条件。お空を飛べてナンボの職場。少数精鋭が基本で、違法研究所や犯罪組織の摘発など危険度の高い任務が多い。それ故にここも高給取り。自意識過剰のおバカが多数希望し、見事に散ってゆくのが後を絶たないらしい。

大前提で空を飛べないから無理。何より白い悪魔がいるため大却下。

「ということ、頭が良いから執務官や特別捜査官とか目指すのかい？」

「いや、俺はチキンハートだからそんな責任の重い仕事は無理だ」

執務官や特別捜査官は魔導士としての能力より、個人スキルが重要視される。特定の部隊に専属というのもなくはないが、呼ばれれば行くみたいな便利屋になる場合が多い。個人で事件や犯罪者を追うケースもある。自分で部隊を設立する剛の者も居るとか居ないとか。特殊職のため資格試験は厳しいが給料は所属部署＋役職手当になるため棒に高い。子供達が一番あこがれる職種になる。

俺は試験勉強がメンドイし責任が軽い方が良いのでパス。それに金髪の依存症とセクハラ子狸が、それぞれ執務官と特別捜査官を目指しているらしいから断固No！

「そんなわけで俺は陸を希望します。サラリーマン万歳！」

時空管理局地上本部、通称「陸」。

ミッドチルダの地上を守る、市民に対して一番身近な部署になる。他とは違って、一般職員は毎日帰宅できるので非魔導士や適性の低い陸上魔導士などが多く配属されている。基本的に給料よりも健康を優先する人、海と陸にいけなかった残念な人が配属される。かなり稀だが、「オイラが地上の平和を守るんだ！」という熱い人間もいる。また、配属後に才能を開花させ成長した者は、かなりの割合で海か空に引き抜かれる。なんとも不遇な部署である。

「ふーん。現実的に考えてるのな、まもるは」

「出来れば管理局には入りたくなかったでござる。それが叶わないうなら出来るだけ命の危険が少ないところに行きたいのでござる。」

俺は小さい人間なんです。っていうか、そういうお前さんこそどうなんだよ？ やっぱ海か？」

「いや、俺は執務官を目指してる。そのために入学遅らしてまで必死に勉強したんだよ。勤め始めたら試験勉強どころじゃないからな」

「努力の人だったのね、ティードは。俺はてっきりその年まで引き籠もりだと思ってたよ。メンゴメンゴ」

「ホンツとに人をおちよくるのが好きだなお前は……。いつか痛い目見るぞ？」

残念。軽率な発言により、現在進行形で痛い目にあってます。

……いつかあいつらギャフンと言わしてやる……。

「で？ 資格関係はどうするんだい？」

「一応考えてるのはデバイスマイスターのB級かな？ 民間でやるには十分でしょ」

俺さ、義務就職期間が明けたら辞職して市井で面白デバイス作るんだ。魔法を発動させるたびに「しんにつぱり！」とか「ああん？ あんかけチャーハン？」とか叫ぶ奴。絶対売れる。確実に売れる。

「まだ訓練生になったばかりなのに、退職後のことまで考えてるの！？ 先を見据えているというかなんというか……」

俺は未来に生きる！ 田舎に住んで優しい嫁さん貰って一姫二太郎で円満な家庭を築くんだあああああああつ！！

「俺の人生設計は一先ず置いて。次の講義はなんだっけ？」

「ああ、……えーっと、部隊行動理論？だね。必修科目だから遅刻できないよ」

「ん。外だっけ？」

「そだね」

「んじゃ行こうぜ」

「でもさ、これ座学でもいいよね？　なんで実習なんだろう？」

「あの油ギツシユハゲテルオは無駄に熱いからな」

「……納得」

俺たちが演習場に着いた頃には、他のクラスメイトは全員整列して油ギツシユハゲテルオ（本名：ライト・フロイル）を待っていた。この事実には俺とティードは戦慄した。奴の異名は伊達ではないのだ。光の加減、時間帯による発汗率、奴の行動原理、自分の立ち位置など、様々な要因がベストにマッチした瞬間、フラッシュグレネード並みの光を反射するのだ。

つまりどうということかというと――

「「「「ぐああああ……！ 目があああ、目があああああ……
……」」」」」

リアルム。力状態になるのである。

俺とティーダを含めた約五名が今回の犠牲となった。

02 親友と簡単な説明（後書き）

早速いろいろ捏造しますた。

03 考える人と考えない人

早いもので、時空管理局のソー。。。イこと油ギツシユハゲテルオ（本名：略）の洗礼を浴びてから一年と十ヶ月ほど経過した。何が言いたいかというと卒業間近なのだ。一年間の基礎訓練課程と、それぞれ五ヶ月のB級A級デバイスマイスター講座を順調にこなし、資格試験も合格した。可も無く不可も無く、それでいて若干標準より下目な陸戦C-という成績で卒業することになったのだ。所持資格はB級デバイスマイスターとA級デバイスマイスター、それに試験も受けてないのになぜか取得済みになっていた小隊指揮資格。本当に何時取ったのだろうか？ 疑問は尽きない。

しかし、分かっていたことだが、やはりミッド式は体になじまない。どうにも貧弱な気がする。攻撃然り、防御然り。そして何より自身に纏う防御が、なぜ”バリアジャケット”なる服なのだろうか？ 結局、空飛んだり身体強化するだから鎧とかの金属でも良いだろうに。そのほうが安全だと思うのは俺だけなのだろうか。

しかしそれももう暫くの辛抱だ。卒業まで、いや、最後の魔力資質の検査でデバイスの持ち込みが解禁される。それも各部署の人事部長の前でだ。表向きは、そこでデバイスとの相性と適性を見極め、より最適な部署へ所属させるためだとか。まあ、実際にはスカウトする人材を物色するためなのだろうけど。

だが俺にとってはそんなものなんら関係ない。俺が行くのは「陸」しかないのだから。

——「陸」に拒絶されたらどうしよう？

リンディ・ハラOWNは素直に驚いていた。

「まさかここまで凄い子だったなんて……」

その手には数枚の報告書。調査対象は織部まもる。なのは達の強い要望と、ロストログア「次元刀」を管理局で確保するために、自

分が半ば強制的に陸士訓練校に押し込めた少年である。

「陸戦ランクはギリギリ平均値のC-。しかし、実力はそれを補って余りある——か」

一枚めくり、陸士訓練校と士官学校の合同で行われた、「模擬戦闘訓練」の「小隊競技」に目を通す。そこには通常では考えられないことが書かれていた。

士官学校とは文字通り士官を育てる、つまり将来の指揮官を、ひいては時空管理局の未来を担う若者を育て上げることを目的としている。それ故に門戸は非常に狭く、またくることが出来ても更なる成長を要求される厳しいところなのだ。それに対して陸士訓練校は兵士を育てる場所だ。内容は即効性のあるもので、学ばせるというより体に教え込むといった方が正しい。悪い言い方をすれば犬の躾と一緒になのだ。

素晴らしい才能を素晴らしい環境で。それなりの才能をそれなりの環境で。最終目標が異なり、育て方が違うのだ。よって、同じ局員の卵といえども大きな差が出る。そして、それは当然士官候補生達の方が優れていた。

だが、その常識をこの少年は覆してしまった。

誰もが疑わなかった士官候補生たちの上位独占。しかし、蓋を開けてみれば優勝”以外”の上位独占となってしまったのだ。

「全く、本当に優秀ね……」

映像資料によると、彼の戦術は人道に反するものばかりだ。だが、いち部隊の長として眺めるとその本当の姿が見えてくる。彼は、い

や、彼の小隊は常にベターな行動しかとっていないのだ。

相手が隙をさらし、そこを突けば容易に瓦解する場面でも、それが誘いかもしれないという可能性がある限り絶対に手を出さない。隊員が窮地に陥っても、必要がなければ助けようとせず、むしろそれに釣られてきた敵を打倒することを優先する。人として間違っており、組織として正しい。なんとも合理的な判断である。

「だけど、小隊は学校毎にランダムで組まされるはずだけど、あの短時間でよく信頼し合えるようになったわねえ」

数の暴力、という言葉がある。個人の實力が同じ位というのを前提とすると、単純に言えば頭数をそろえた方が強いということだ。しかし、それは何千何万と言う次元においてのことである。ツーマンセルや小隊規模の集団なら、数よりも団結力がものを言う。もちろん、簡単に団結なんて出来るわけが無い。普段一緒に行動し、同じ目的を目指すうちに育まれるものであるからだ。少なくとも、リンディはそう信じている。

「指揮官として優秀なのはいいけど、魔導士としてはどうなのかしらねえ」

次のページにある個人競技に目を通した瞬間、彼女は眉をしかめた。

「……なんか、地味ね」

織部まもるの戦闘スタイルは後の先、所謂カウンターだった。それもその場で動かず徹底的に防御して、相手が崩れたところで大きいのを放つ。非常に効率の悪いものだった。それでも、数百人の参加者の中でベスト30に食い込んでいるのは見事と言える。

「……華が無いわ」

個人競技に関してはコメントしようがなかった。

シャリオ・フィニーは自他共に認めるメカオタクである。デバイスが、取り分け高性能機や希少品が関われば、二徹三徹ぐらいなら鼻歌交じりにこなしてしまう、そんな情熱を持ったA級デバイスマイスターなのだ。

そして今、彼女の目の前に一つの生贄が晒されたいた。

「これが噂の装着型デバイス『試作魔導鎧』まどうアーマーの乙型か……」

「試作魔導鎧」まどうアーマーとは、『魔導士および騎士の身体強化の補助が出来る汎用装備』というコンセプトに基づき製作されたものであり、こともあるうに、A級デバイスマイスターの資格試験という大舞台で提出され、評価された作品だ。なお、製作者は前述の資格をその試験で取得している。

外観は試作品であるということも影響して、いたってシンプルに纏められており装飾の類は皆無だ。指貫グローブと肘ぐらいまである金属製の手甲は一体化しており、両肘から延びた数本のケーブル

が動きを阻害されない程度のゆとりをもって、肩と首の裏側のポイントを経由して背中の中パックパックに伸びている。

この装備の根幹を成すバックパックもそれほど大きくはない。500mlペットボトルを三本半並べた程度だ。それを開けると大型のカートリッジが、いや、ここまで大きいともはやタンクと呼んだ方がいいだろう。それが二本固定してある。それぞれの上に『魔力素吸入弁』、下部に『魔力素放出弁』が設置されており、現在吸入弁は閉ざされ、放出弁が開放されている。つまりタンク内の魔力素は空になっている。そして先ほどのケーブルが右のタンクの側面に繋がっており、左のタンクから延びたケーブルは途中で接続端子のみを残してそこからの先がない。

「たぶんこの部分には入手できなかった、別の『試作魔導鎧』まじつアーマー接続されるのかな？」

彼女の意見は的を射ていた。

今回提出された魔導鎧まじつアーマーは全部で3点。乙型と同じ上半身に纏うタイプの甲型と、下半身を覆うタイプの丙型がある。そのうち丙型と接続されるのだ。ちなみに、乙型が機動力重視、甲型が防御力重視となっている。

「——ケーブルは魔力をもらし易くてえ、周りの布や金属部分は保持しやすいみたいだね。使用したら魔力の膜を着るみたいになるのかあ……」

魔法を単独で行使するには、リンカーコアの所持が絶対条件になる。たとえ高性能なインテリジェントデバイスを携えようと、リンカーコアがなければ魔力の収束が出来ず、プログラムを走らせる前にそれは拡散してしまう。周囲にかなりの濃度の魔力素が漂っていればそれを直接使用することも可能だが、そんな都合のいい戦場な

ど皆無に等しい。逆に言えば、十分な濃度さえあれば魔法の行使が可能なのだ。

「――魔力、……放出、……収束、……。――！？」
まさかコレって！！ いや、まさか……。――でも――」

まだ足りない。

でも、もし仮に――

デバイスとタンクをケーブルで直結できたら？

手足の先、魔法行使の際に収束に必要な部分に魔力素開放弁を増設できたら？

そしてなにより――

『主人の命令で、魔法の行使を代行できるAIが開発されたら？』

「――最終目標は『擬似リンカーコア』の開発？」

その考えに到達した瞬間、彼女は二つの意味で身震いをした。

一つは恐怖。

まどつアーマー

この魔導鎧が完成したら、魔導士の重要性が薄れる。中には、その影響でクビになるものも出てくるかもしれない。少なくとも、人手不足の「陸」には歓迎され、エリート志向の「海」と「空」は忌

避するのが容易に想像できる。その温度差が拡大すれば時空管理局の分裂、もしくは崩壊へとつながるだろう。そしてそれは、次元世界の混乱を意味する。

もう一つは歓喜。

まどうアーマー

魔導鎧の完成は時代の節目になるのが予想できるからだ。それが平穏だろうと混乱だろうと、とにかく変革の切欠になることは間違いない。

過去にも時代を変えてきた人物や事件は多々ある。代表的なのは古代ベルカに関連することだろう。聖王家の滅亡とほぼ同時期に起きたベルカの次元世界の崩壊。そこから流れたきた人々や技術によって、ミッドチルダに新しい風が吹き込まれ、停滞した文化は再び動き始めたのだ。

偉人や大事件がもたらしてきた『時代の転換』を今度はただの“道具”が行うのだ。

技術者としての凄く興奮する。

一通り考察を終えたところで、今度は開発者に興味が移った。残念ながら、つい最近資格を取得したとあいまって、詳しいことは分からなかった。だが名前だけは確かめることができた。

「——オリベ・マモル」

我らが主人公、織部まもる。その人であった。

一方その頃、当の本人は――

「うううおおおおおっ！！　肉じゃ！！　お肉祭りじゃあああ
あああっ！！」

「ちよっ！　おまつ！　ドンだけ喰うんだよっ！！」

『卒業＋A級マイスタおめでとうぱーちいー』にて、あの手この
手の口八丁で騙くらかし、ティーダに肉を奢らせていた。

「俺も卒業なんだよ！　なのになんで俺の奢りなんだ！？　普通割り勘だろ！？　おいまてっ！　やめろっ！　それは俺が育てた力ルビだっ！

「イエーイ！　おうもちかえりいいい！」

「……あっ……、……ああ……。ちつきしよおおおおおお
おーーーーー！！！」

かなりご満悦であった。

03 考える人と考えない人（後書き）

三人称視点に挑戦。ムズイ

04 お肉、その後に（前書き）

閑話的なお話

04 お肉、その後

「……う……、……う……う……」

三日ほど前からティーダが超ブルーだ。具体的に言えば俺がお肉様を食い散らかした日の翌日から。部屋の隅に足を抱えて座り、財布を見ては泣き、泣いてはまた財布を見る。ただそれだけを繰り返す。始めのうちは「やっべ、やり過ぎたかな？」と思っていたのだが、さすがに三日目となると正直ウザイ。しかも、今朝からそれに加えて「ティアナ……、ティアナ……」なんて加えだしやがった。

「あのさあ、俺が悪かったからさ。そろそろ機嫌直してくれよティーダ。……それでさ、ティアナちゃんがどうかしたの？」

意を決して聞いてみる。正直関わりたくないが、ルームメイトなので仕方がない。

「——『二年間支えてくれてありがとう』ってプレゼント渡すつもりだった。なのに金がない……」

——うわあ。コイツもしかして……。うわあ。

「ティアナがいてくれたから、支えてくれたから頑張れたんだって感謝したいのに……」

「でもお前落ちたよね。執務官試験」

「うぐうっ！ う、う、ああ、あああああっ！ ゴメンよ！ ゴメンよティアナ！ ダメダメなお兄ちゃんてゴメンよお

おおおおおっ!!」

しまった!

特大の地雷を踏んでしまった。

やばい、やばいぞ。このままの精神状態で明日を迎えたら、最悪「君の就職先はありません。残念でした」なんてことになりかねない。それじゃあ可哀想だ。——ティアナちゃんが。

え、えええーい! こうなったら最終手段じゃ!

「わかった! プレゼント代は俺が出す! 俺が出すからいい加減機嫌を直してくれ。このままじゃ俺もお前も明日に差し支える!」

効果は覲面。ピタッと泣き止むと恐る恐るこちらに顔を向けてきた。

こっち見んな! こちとら5年前からシスコンはトラウマなんじゃ! 特に妹のことを考えてる時のシスコンはなっ!!

「……ホント?」

「ホントホント」

「……ホントにホント?」

「本気と書いてマジと読んでさらにホンキと読むくらいホント!」

「……わかった」

いよっし! コレで勝つる!

ティーダがプレゼント選ぶ

←

俺がそれを買う

←

ティアナちゃんがそれを貰う

←

蝶が羽ばたくとどこかでトルネード的な理論展開！

←

エイミイさんがクロノを惨たらしく振る

←

俺とエイミイさんが幸せになる！

キタコレ！ テンションあがってきた！

今の俺なら、春秋桜の理事長だったり三国志の医者だったり戦争博物館の館長だったりする人の乗る、鉄で巨大で神なロボットが振り回す、黄金のピコハンにすら耐えられるような気がする！！

ごめん、やっぱムリ！

でもテンションは上がりきった！

今、このままの状態でパラディンの封印を解けば、いろいろ凄いいことが起こらなくもないような予感がする！ 具体的には、戦死者を選びそうな美しい女性が祝福してくれるとか。

ZENは急げだ！

俺は封印を解くぞ！ 次元トオオオオ『ガシッ』 オオオウウッ！

——んん？ ガシッ？

妙な雰囲気と、脚を誰かに引つ張られる感触。

いつもの俺ならすぐさま引き剥がし、三機合体三変形の三男っぽい奴ばりに空に打ち上げ、落ちてきたところをスグルさんのネジ回しで決めて、2・7カウントで自分から離れてワザとらしく悔しがるぐらいのことをするのに。

なぜか、彼の目を見た瞬間、『ムリっす。できねえっす』と思っ
てしまった。

「あの……、ティーダさん？ 自分、これから用事があるのでその手を離していただけると有難いのですが……」

「……行く」

「あの……、不躰ですがどちらへ？」

「街、プレゼント買いに」

刹那、俺にかけられるバインド。転がる弱者^{おれ}。

”今”の実力では到底抜けられそうにない程硬い。

そして動けない俺を軽々と『片手』で持ち上げながら立ち上がる
ティーダ。

「アレ？ 俺って荷物扱い？」

「違う。サイフ」

「なんだ。それならよかつ——サイフだって
w a l l e t ！？ いや
いや！ 全然よくねえーよっ！」

精一杯の言葉を華麗にスルーして、ズンズン廊下を進む男と喚く
サイフ
俺。

向かった先は駐輪場だった。そしてそこにはティーダの単車がある。

「えっ？ えっ？ バイクで行くの？ 落ちたら危ないからバイク
ンド外して！ しがみ付くからさ！」

ティーダは黙して語らず、ただ坦々と俺と荷台をバインドで固定
し始めた。

——横向きに。

「ヒッ、ヒイイアアアアアアッ！ せ、せめて縦にして
！ 後生だからっ！ 後生だからあああ！」

後日、陸士訓練校と歓楽街を結ぶ主要道路に、『リアルな悲鳴を上げる人形を積んだ暴走バイク』、という新たな都市伝説が生まれた。

「うわっちゃわっ！？　ねえ！　かすった！　かすったよってばさー！！　トラックだよトラック！！　——　うおう！？　こんな所でバインド減らすなああああ！！！」

リアルすぎて、悲鳴を聞いた子供が泣き出してしまったとかしいとか。

04 お肉、その後に（後書き）

ティアナはヒロイン（笑）候補です。

05 ニアミスと他人の評価

はいみなさまこんにちは。昨日、生きていることの素晴らしさを実感した織部まもるです。十数台のトラックとニアミスしながら街へ輸送されたあと俺は、あまりの安心感に気絶してしまい、気がつけば寮の廊下をティードに担がれて運ばれているところでした。ティードによると、プレゼントを選んでいる時も、それをティアナに渡しに行く時も、そして帰りの時も、終始気絶していたとのことです。恐らく、俺の意識の深いところが「今起きたら精神に重度の負担が掛かる」と判断したのだと思います。

まあ、それはさておき。

本日は、『士官学校陸士訓練校合同説明会』です。通称『人事部の戦場』。なにやらキナ臭い感じがしますが、去年の惨状を見るに否定しきれません。やっぱりどこも優秀なのは欲しいってことだね！俺は「陸」一択だから問題ないけど。

なにはともあれ行ってきます。

あー……、パラディンの封印そのままだった。ま、面接と行き先が決定してから最終測定だから大丈夫か。

追伸：ティードは勝手に俺のサイフの中身を使っていた。具体的に金額までは言えないが、軽く絶望できる額と言っておこう。

説明会場である多目的ホールに、ひどく場違いな三人がいる。年のころは17。何れも美人で、その中の一人にいたってはモデル顔負けである。彼女達は男からは色目を、女からは羨望の眼差しを集め、一部の高官からは憎悪の視線を向けられていた。それを知っただけで、彼女達は定かでないが、本人達が気にする様子は微塵も感じられない。

そして、彼女達はこの会場で誰かを探している模様だった。

「フェイトちゃん、そっちにいた？」

「ううん、こっちにはいないみたいだよなのは」

「こつも見つからんと、寝坊でもしてるんちゃうかな？」

高町なのは一等空尉の問いかけに答えるフェイト・Ｔ・ハラオウン執務官。それを茶化す八神はやて三等陸佐。それぞれ地位は高いのだが、いかんせんまだまだ小娘である。こういった公式の場では常識であるはずの”自分より上の階級の者への挨拶”ができていなかった。彼女達が声をかけるのは階級の区別なく自分達と面識があるものに限られており、それは「海」と「空」の人間に多くいたのだ。当然、「陸」の人間は面白くない。はやてに至っては、「陸」に所属しているくせに二人のあとについて周り、自分の顔を売ることとに終始している。

「やはり、場を理解できない小娘か……」

声をかけられない人々の中にレジアス・ゲイズ中將の姿もあった。ちなみに、この会場で唯一の将官である。

「今年はどういった感じだ？」

レジアスは、苦楽を共にする人事部の三等陸佐に声を掛けた。

「今年は例年より若干多いですね。不思議なことに、とあるクラスに所属する生徒の半数近くがウチを希望しています」

おそらく落ちこぼれクラスの生徒なのだろう。他所に希望を出しても結局落ちる、だから初めから淡い希望を持たずに「陸」に来たのだ。レジアスはそう結論付けた。

「で、例の青年は？」

「まだ会場にすら来ていません。サボるということは学校側が許しませんから、恐らく寝坊でもしているでしょう」

通常、将官クラスの間がこの場に顔を出すことはない。

ではなぜレジアスはわざわざ足を運んだのか？ その理由が話題に挙がった青年にあった。

「魔導士ランクは高くはないが、従来とは方向性の違うデバイスの開発技術。いや、発想力といった方が正しいか。それに加え高い指揮能力。この分だとまだ隠し玉がありそうだな……」

レジアスが一番評価したのは「発想力」だった。今回の資料には作成したデバイスに関連のある情報しか記載されていないが、青年のアドバイスを受け講義内容を変更したら効率が上がった、という報告があったのだ。組織の効率化を図れば人手不足にも悩まずに済むのではないか？ 彼はそう考えたのだ。

もちろん、レジアスが欲したように、他の部署でも彼をスカウトしようとしていた。ただ、理由はそれぞれ違っていて、「海」はデバイスの技術力を、「空」は指揮官能力を評価していた。

「入り口には何人張り付いている？」

「人事部員二名と外部協力員で合計三名です。相手は若い男なので飛び切りの美人に頼みました」

「？ 人事部員二名は分かるとして外部協力員とは誰だ？」

「オーリス一等陸尉です。非番で自分が個人的に報酬を出すのでお願いしました。交渉も任せようかと思っています」

「……だから出掛けにいなかったのか……」

オーリス一等陸尉。ファミリーネームはゲイズ。レジアス・ゲイズ中將の一人娘だ。

容姿端麗でスタイルも抜群、身長も女性にしては高い方なので、「陸」ではクールビューティーで通っている。それにも関わらず浮いた話は皆無である。噂では、父親であるレジアスが娘可愛さに、言い寄る男に圧力をかけているとか。

「休日ぐらいは遊びにいてもいいと思うのだがなあ……」

レジアスは確かに娘を可愛がっている。しかし彼女も今年で25歳だ。浮いた話の一つや二つ、あってもらわないと困るのだ。

このまま嫁^いき遅れでもしたら、先に逝った妻に申し訳が立たない。

中將から一人の父親に戻り、純粹に娘の心配をしていると、不意に面談スペースのドアがノックされた。

「入りなさい」

三等陸佐が返事をする。

すると、訓練生の制服を着た青年がドアをくぐってきた。

ドアを閉め、こちらに向き直り、背筋を伸ばして敬礼をする。その姿はどこか様になっていた。

（ほお……）

レジアスはその敬礼を見て、心の内でかすかに感嘆する。
青年の姿勢は綺麗で一部の揺らぎもない。誰が見ても気持ちのいい敬礼だったのだ。

「——んっ、名前は？」

三等陸佐も見とれていたのだろっ、僅かに居住いを正して名前を聞く。

「ハッ！ 自分は陸士訓練校第五十三期生、織部まもる訓練生であります！」

「「……はあ？」」

入ってきた青年の正体は、先ほどまで二人が話題にしていた件の青年だったのだ。ちなみに入り口からの連絡はまだない。

「（おい、どうするんだ？）」

「（……どうすればいいのでしょうか？）」

二人は小声で相談し始めた。
スカウトできればいいな、と思っていた人物が前触れもなく訪

れたのだ。いかに老練な三等陸佐と威厳あふれるレジアス中將といえども、突飛な出来事に動揺を隠せないでいた。

「（そつだ！　すぐにオーリスを呼び戻せ！　あいつに交渉させる！！）」

「（はいっ！　直ちに！！）」

とりあえず、すぐに交渉担当のオーリスを呼び出すことにした。彼女に丸投げしたとも言える。

「あ、あの～」

二人の密談に不安が募ったのか、遠慮がちにまもるが声をかける。それに対し二人は極限までテンパった。

「「な、なにかね？」」

「もしかして自分は歓迎されていないのでしょうか？」

マズイ。

交渉できるのに、交渉できずにここで放してしまったら笑い話にもならない。

せめて。せめて交渉担当^{オーリス}が来るまでは彼をここに引き止めなければ！

二人してそういう結論に到達し、ここに来た訓練生や候補生に始めにかける言葉を紡いだ。

「ようこそ、地上本部人事部ブースへ」

「聞きたいことがあれば何でも聞くといい。我々に出来ることがあれば全力でサポートしよう」

一先ず、これで会話を続けることが出来るだろう。

当面の危機から脱した二人は満面の笑みを浮かべていた。

しかし、今度はまもるの方から一方的に交渉終了宣言ともいえる言葉が出てきた。

「自分を地上本部に所属させてください！　お願いします！！」

まもると会話をしていた二人を含め、そのブースにいた全員がフリーズした。

皆一様に口をだらしなく開き、ポカンとした顔で彼を見ている。

この人が中将閣下ですよ、とレジアスの顔を知らない第三者に説明しても、十人中九人は某鈍少女のごとく「嘘だっ！」と言っただろう。それほ今のレジアスには威厳が欠片もない。

ただ幸いなことに、まもるは頭を下げていた為それを見ることがなく、「陸」の評価を下方修正せずにすんだ。

そのころ混雑する会場の中を、人を撥ね飛ばす勢いで失踪する一人の女性がいた。

「会場内の、しかもいきなりウチのブースに現れるなんてどういうことよ！ アレは成功報酬なのよ……！！」

交渉担当のオーリスである。

絶対に成功させる！ そう息巻いていた彼女だが、なんやかんやですでに成立していた為、ブースに着いたときに見事に空振った。そのときの羞恥に顔を朱に染めるオーリスは異様に可愛かったと、レジラスとまもるは後に語ったという。

05 ニアミスと他人の評価（後書き）

オリスもヒロイン（笑）候補です。

06 本当（笑）の実力

「ほお、そんな考えで織部君はあのデバイスを考案したのかね。着眼点が素晴らしいな」

「確かにそういう捉え方も出来ますなあ。これが若いってことなのですかね中将」

「お褒め頂き有難うございます。しかしこういった事柄には老若男女は関係ありませんよ。要は常識を絶対と考えることですね。常識は人を縛りつけますから」

今現在、中将と三佐と俺の三人で世間話をしております。

亀の甲より年の功、お二人とも非常に聞き上手の話し上手でこちらとしても助かっております。

それに、権力が大きかろうと地位が高かろうと、相手は人間に変わりなく、話そうと思えば案外話せるものです。ぶちゃけ、面白いオッサンと茶飲み話しているようでかなり楽しい！ あ、そのオネーサン、コーヒーお替り！

「一つ疑問に思ったのだが、なぜ君は地上本部を選んだのだね？「海」や「空」にいかうとは思わなかったのかね？」

これは試されてるな。

ここで躓けば、この先ただの便利な駒で確定になるような気がする。

だが、さつさと辞めて民間に降りたい俺としては、管理局員としての立場なんてどうでも良いから、正直に訳をゲロっちまうんだけどなあ！

「簡単に言えば好き嫌いの問題です」

「……理由を聞いてもいいか？」

聞きたいのならお答えしましょう！

「中将、質問を質問で返すのは申し訳ないのですが、「所有者のいるロストログア回収時の行動規範」はご存知でしょうか？」

「ん？ 専門ではないから詳しくは知らぬが確か、『事情を説明し説得、その後金銭による補償』だったか？」

「その通りです。ではそこが管理外世界だった場合は？」

「いや、変わらんだろう？ 所有者であることには違いはない」

「それが違うんですよ。……ではどうやって？ って顔してらっしゃいますね。簡単に言えばその場合、彼等は『無人世界の遺跡に安置されているロストログア』として対応するんです」

「なっ！ では勝手に持っていくと言う事か！？」

「それならば良かったんですがね……。彼等はちゃんと名乗るんですよ、『時空管理局だ！ これよりロストログア。を回収する！ 抵抗すれば公務執行妨害で逮捕する！』とね。これでは強盗ですよ」

あーあーあー、呆れてる呆れてる。

そりゃそうだよな。正義の味方が現地の人間にとってはただの強

盗と認識されてるんだもん。トップに立つ人間としては頭痛いよなあ。

「……随分と詳しいが、もしや……」

「ご明察とおりです。自分も持っていたいました」

「申し訳ない。今度弁済する」

「いえお気になされずに。持っていていかれても戻ってきますから、まだ家宝は自分が所持しております。あっ、なんでしたら今からお見せしょうか？」

このあとの封印を解くときに必要だしね！

「見てみたい気はするが、取りに帰る時間はないぞ？ そろそろ資質審査が始まる」

「呼び出すだけだから一瞬ですよ。それにロストログアといっても、古いだけで文化的価値ぐらいいしかありませんし、次元震なんて物騒なことは起こしようがないですからね」

そんなわけで呼び出します。どっかの召喚士のように特殊な石等使わず、呪文もましてや魔力なんて消費しません。ただ”来い”と念じるだけでアラフシギ！ 目の前には白い鞘の小太刀が！

「これが持ち去られても所有者に戻ってくる、特にキケンとはいえないロストログア、我が家の家宝で、名を『次元刀』と申します」

こいつの転移は『指定座標の存在を書き換えて出現する』といっ

た結構ヤバイものなんだけど、完全に別系統の技術だから言わなくても良いよね？

「——美しい短刀だな」

「有難うございます」

三人で机に置かれた一振りの小太刀を視姦——ゲフンゲフン、もとい鑑賞する。

それは美人のオネーサン、オーリス一等陸尉が時間切れを告げるまで続いた。

会場の近くにある管理局の訓練施設、その一角に織部まもる、ゲイズ親子、陸の人事部、初めから陸に希望を出している訓練生がいた。ちなみに訓練生のほとんどはまもるのクラスメイトである。

「では、始めます」

まもるがゆつくりと一団を離れ、少し開けた場所に出る。関係ない人々の奇異の視線が集まるが、それを気にする様子は微塵も感じ

させない。堂々とした足取りだ。

そしてまもるの視線の先には漂うように浮かぶ次元刀がある。

「次元刀、頼む」

『承知した』

初めて声を発したロストロギアに驚く「海」と「空」の面々を後目に、厳かに儀式は開始された。

『我、^{なれ}汝に問う。^{なれ}汝は剣か？』

「否、我は剣に非ず」

『^{なれ}汝は槍か？』

「否、我は槍に非ず」

『^{なれ}汝は弓か？』

「否、我は弓に非ず」

『ならば、^{なれ}汝はいかなる者や？』

「我は盾。聖地に立ち塞がるただの壁」

『振るわれる凶刃、^{なれ}汝はどうする?』

「動かず避けず、ただはじく」

『敵の刃が王に届く、^{なれ}汝はどうする?』

「王の傷を肩代わりする、傷つくのは盾のみ」

『無辜の民に災厄が降りかかる、^{なれ}汝はどうする?』

「民を逃がし、我は暴虐を防ぐ壁となる」

『——ベルカは滅びた。今、王も民もない。^{なれ}汝はどうする?』

「……ベルカは関係ない。王は我の中におり、民はあまねく世界^{あまた}に数多い。やることと、できることは変わらない。我は盾、ただ守るだけだ」

『^{なれ}汝の意思、しかと聞き届けた。今ここに、第二十七代聖王、オリヴィエ・リーン・ベルカの懐剣にして名代の次元刀が、守護者「パラディン」の封印の解除と、織部まもるの第三十二代目「盾の一族」党首の襲名を宣言する』

「謹んで拝命する」

『王と一族を継ぐ新たな子よ。汝^{なれ}に行く末に幸多からんことを願う』

「感謝する」

ここに制約は成立した。

ふう、終わった終わった。

しかし恥ずかしいセリフのオンパレードだったな。宣誓中は気がつかなかったけど、今も人目を引いてるし。さっさとセットアップして、さっさと魔力資質検査をして、さっさと部屋に帰ろう。うん、それが良い。

次元刀の最後のアドリブにだけは焦ったなあ。まあ、無事に終わったし気にすることもあるめえ。

「中将、終わりました」

「あ、ああ。うむ、それじゃセットアップして検査するか」

「了解であります」

何気に今回が初めてだったりする。

無理やり詰め込まれた知識の中に、姿に関する情報もあったけど、一人称視点だったからなあ。そんな感じでちょこつと緊張しております。

んでわでわ、早速やりますか！

父であり中将であるレジアスの影に隠れながら、オーリスはまものの宣誓を聞いていた。厳肅な雰囲気の中で誰もが言葉を失う中、彼女だけは彼を見据え、その言葉の一つ一つを理解しようとして聞き聞いていた。その所為で、魔力資質を検査する為にセットアップするという彼の言葉を聞き逃してしまった。

「パラディン、顕現せよ！」

『御意』

まもるの言葉に従い、彼のデバイスであると思われる声こたがそれ応える。次の瞬間、彼の足元から銀色の魔方陣が展開された。

あまり見かけない魔力光、それが彼女の主観で突然展開された為、少々驚いてしまった。

（キレイな光……。見る角度を変えるといろいろな色に見えるのね……）

事実、彼が展開する魔力光を銀と答えたのが大半であったが、中には少数ではあったが赤・青・緑、と答えた人間もいる。

（術式は近代ベルカ……。——いえ、違うわね。もしかすると古代ベルカ？）

現在の魔法体系は、大きく分けると三つになる。ミッド式、古代ベルカ式、そして古代ベルカ式をミッド式で再現した近代ベルカ式だ。正確には近代ベルカ式もミッド式に分類されて然るべきなのだが、いろいろな理由から出来ないでいる。所謂政治判断という奴だ。一見するとまもるの足元に広がる魔方陣はベルカ式のようなだが、正三角形の各辺が内側に反っていたり、中心の剣十字が十字架だったりと違いがある。オーリスの見解は間違いではないのだが、厳密に言えば違うのだ。

セットアップが終わり、彼の姿を見る。そこにはくすんだ銀色の甲冑を身に纏い、大きく羽を広げた鳥を模した兜を被る騎士がいた。手には大きな盾、両肩には三角錐状のものがし字の青い装甲の上にマウントされている。

（なっ！ 騎士ですって！？ こんな彼のデータにない！！）

その場の全員が思ったことだろう。なぜ騎士がここにいる、と。陸士訓練校の生徒はそのほとんどがミッド式の魔導士だ。一部例外はあるものの、騎士を目指すもの、近代ベル力を使う若者は聖王教会系列にて学ぶ。暗黙の了解のうちではあるがそんな住み分けがなされているのだ。

（このままだと問題が起こる可能性があるわね……）

近代ベル力式も多少の装甲はつけるのだが、基本がミッド式のため、通常の魔導士のようにバリアジャケットのメインは布だ。しかしまもるのそれは全身甲冑といっても差し支えないほど布の面積が圧倒的に少ない。

オーリスはこの時点で断定した。——古代ベル力式の使い手だと。

（すぐさま聖王教会に連絡。彼が古代ベル力式の使い手だと確定させて、そのあと希少技能^{レアスキル}として申請、それから——）

非番であるが自身の優秀さのせいで、己の仕事を増やしていくオーリスであった。

「結構重いな、コレ」

『要我慢』

中心人物はのんきだった。

06 本当（笑）の実力（後書き）

まもるのセットアップ姿は

『ROのパラディン+ガンダムOOの肩の太陽炉』
といった感じです。もちろん意味はありますよ？

07 結果と約束（前書き）

分量が少ない……。

脳内プロットを書き起こすべきだろうか？

07 結果と約束

セットアップ終了後、簡単に魔力量の検査をしたらCからAに上がってた。どうやら次元刀の封印は結構きつかったらしい。まあ、魔力量上がったって、戦闘スタイルは変わらないから、総合ランク陸戦C - なんだけどな！

「ご苦労様。一応計り終えたわ。それで、地上本部にくる意思は変わらないのね？」

「勿論です。地上本部以外考えられません！」

キレイなオネーサン、確かオーリス一等陸尉といった方が声をかけてくる。それに即答する俺。敬礼も忘れません。だってこの人、とっても美人なんですもの！ 良いカッコしたいじゃないか、男の子だもんっ！

「ちよつと待った！ もつと良い条件を提示するから次元航行部隊にこないかね？」

「いやいや、航空武装隊にしなさい。損はさせませんよ？」

さつきから、俺とオーリスさんの会話に割り込んでくる八工がチヨウざい。俺はきっぱりと陸に入ると明言してるのに、そんな事実は無いとばかりに勧誘してきやがる。——これはハッキリさせたほうが良いよね？

「地上本部に入ります」

「いや、次元航行部隊に――」

「ハラオウン親子のやり方がキライです」

「なら、航空武装隊に――」

「空戦適性が微塵の欠片もありません」

「……」

完 全 論 破！

これにて勧誘合戦は早くも終了ですね。

それではオーリスさん。あちらで飲み物でも飲みながら細かい打ち合わせを――

「ちょっとお待ち頂けるかしら？」

もう！ だれだよ！

「お初にお目にかかります。私は聖王教会騎士、カリム・グラシアと申します。一応、時空管理局にも席を設けております。以後よ

ろしく願います」

漂う気品、溢れ出す品格、傍目にも「お嬢様です」と言わんばかりのオーラに包まれた女性はカリム・グラシアと名乗った。彼女は聖王教会教会騎士団所属の騎士であると同時に、時空管理局の理事官も務める才女である。ちなみに管理局での階級は少将だ。

「あ、これはご丁寧に。自分は陸士訓練校第五十三期生、織部まもるです。こちらこそよろしくお願いします」

礼には礼で返す、それが礼儀であると思っているまもるは、反射的に挨拶をする。その後、話しかけてきたのだから何かあるのだろうと黙って待っていたのだが、ニコニコしているだけで一向に二の句が出てこない。仕方が無いので、彼は周りの反応を見ることにした。

レジアスは相変わらずの仏頂面だが、その中にはかすかに嫌悪感が見て取れる。よくよく注視しないと分からないレベルなので気付いた者はごく少数だろう。

オーリスは苦虫を噛み潰したような顔だ。厄介ごとが向こうから来た、そんな風な感じがするのも気のせいではないだろう。

そのほかの皆さんは困惑気味。「なぜここにいる？」といった顔や「どうしてここへ来た？」のような顔ばかりだ。しかしそれらはみな好意的、もしくは中立的なもので、レジアスやオーリスのように露骨な嫌悪感を表す者はいなかった。

一通り観察を終え、まもるがカリムに向き直ると、彼女の方にも変化があった。

満面の笑みを浮かべているのである。それも弾けんばかりの、だまもるが邪気の無い笑顔に気圧され一歩後ずさると、カリムはズ

イツと大きく踏み出す。もう一步下がると、一步踏み込む。示し合
わせたかのように彼等は壁際までズンズン進み、まもるが壁にぶつ
かり、カリムが恋人の距離まで彼の顔に接近したところで止まった。

「あの、騎士カリム？ 近いですから離れてください」

「ぜひ我が教会にお越しください！ 騎士マモル！」

「その、自分は地上本部に所属するので教会にはいきません。そ
れと自分は騎士ではありません」

「そんなこと仰らずにお願いします！ 騎士マモル！」

「ですから、自分は騎士ではないんですってば！」

不毛な問答を繰り返すまもるとカリム。このままでは收拾がつか
ないと判断したレジアスは、顎で指してオーリスに仲介に向かわせ
る。ため息を吐きながらも、彼女は言い合う二人に向かっていった。

「織部訓練生！ いい加減にきなさい！ それに騎士カリムもご
自重ください」

彼女の言葉で止まる二人。まもるは安堵したのか胸を撫で下ろし
ている。一方カリムはまだまだ言い足りないといわんばかりに、オ
ーリスを軽く睨んでいた。

このまま聖王教会に目を付けられるのも後々厄介だと瞬時に判断
したオーリスは、カリムにとっては希望で、まもるにとっては絶望
の言の葉を紡いだ。

「騎士カリム、五日後の昼に予定を空けておいてください。それ

までに織部訓練生にはすべき事をやっておいて貰いますので、交渉はその席でお願いします」

「分かりました。では五日後に。それまでごきげんよう騎士マモル」

オーリスの言葉を聞くや否や、まもるの反論も許さずにその場を立ち去る騎士カリム。かなり一方的だが、五日後に交渉という約束が成立してしまった。そこで「誰が会うか！」とか否定の言葉を発することが出来たなら、今後の状況は変わっていたかもしれない。しかし、まもるが叫んだのは別の言葉だった。

「だから！ 俺は！ 騎士じゃ！ なーいーのっ！！」

彼にも理由はあるのだろうが、締まらない幕切れだった。

そのころ出番の少ない三人娘は

「うおおお！
なのはさあ
あん

「にや、にやあああ！ 何この人だかり〜〜！？」

「「「「「
あああああ！
フエイトさああああん
ん！！」「」「」

「うわわわ！人が多すぎて身動き取れないよ〜」

ドドドド、と地響きを立てながら二人に殺到する訓練生と士官候補生達。人々の波の合間で、自称策士は優雅に笑っていた。

「アハハ、二人とも人氣もんやなあ。——つて誰やつ!?」
ドサマギでウチのお尻触つたの! 訴えるでええええええ!!」

訂正、お笑い担当で突っ込みも担当するなんちゃって関西人が、
無様に踊らされていた。

07 結果と約束（後書き）

ホント締まらない締まらない。

あ、お気づきかもしれませんが、ティードさんが公式設定より若返っております。

具体的には五歳ほど。

08 ついに実力を……（前書き）

この時間に投稿したのは気分よく書けたから。
特に中盤らへん。

ちよつと修正。

前半部の最後のセリフをいぢった。

08 ついに実力を……

「祝！ 陸上本部就任決定！！」と、「恐怖！ 聖王教会、騎士カリムの襲撃！！」から5日経過した。この間に卒業式があったり仲間内での宴会があったりなどしたが、概ね平和だった。ただ、スカウトマンが正直うざかった。

新入隊員ということで所属予定の隊舎の寮に部屋を移したのだが、どこでどう知ったのかそこまで押し寄せてくる始末。なんかもう、優秀な人材を引き抜きたいというのではなく、優秀な人材が「陸」にいるのは違法だ、と言わんばかりの勧誘だった。

隣の部屋の住人からも引越し二日目から白い目で見られるようになり、オイラ心が折れちゃうよと偶々見かけたオーリスさんに相談したところ、機密性がちょっと高い部屋に移してもらえた。ついでに情報の隠匿もしてくれるとの事で非常にありがたかった。あなたが女神か！？

それはさておき、本日は聖王教会訪問の日である。行きたくない。行きたくないでゴザル！ でも、レジアス中将直々の命令だから行かなくてはいけないのでゴザル！ でもやっぱり本音は行きたくないでゴザル！！

仕方ないのでこれも仕事だと割り切ることにした。まだ正式に入隊していないのに早速サラリーマン的仕事とか、先行き不安だ。

で、今回のミッションなのだが、どうやら俺の立ち位置を明確に決めることが目的らしい。すなわち、聖王教会騎士団に所属するか否かだ。

これに対し、レジアス中将とオーリス一等陸尉、俺の上司予定の人とその他数名に加え、いてもいなくても拒否権は存在しない俺が

相談した結果、「最上は騎士団に所属しない、最低でも地上本部からの出向という名の名義貸し」ということで落ち着いた。簡単に言えば「だれが所属させるかバーカ!」ということである。俺としても、複数の組織に所属することは負担にしかないので願ったり叶ったりである。上の方々は他にも思惑があるだろうが、まあ俺には関係ない。

モノレールとバスを乗り継ぐ、公共交通機関のコンボで聖王教会に向かう。一応、中將から車を出すと言われたのだが、それは丁重に断らせていただいた。自分で地理を把握したかったと言うのもあるが、なにより中將という高位の人間が、入隊すらまだという最下位の人間に気を使うなんて事はしてはいけないのだ。そんなことをすれば中將が舐められ、最終的には組織の格が落ちる。と、俺は思う。ともかく、下っ端が上に従う、これが組織として正しいのだ!

この五日間のことを振り返りつつ、最寄のバス停から徒歩で聖王教会へ向かう。当然出迎えは無い。まあ、あつちは車か何かで来ると思っっているだろうし、仕方が無いといえば仕方が無い。自然を堪能しながら歩けると思えばいいだろう。実際楽しい。

「おい! その不審者! 止まれ!」

訂正、ちょっと楽しい。

「おい! ……さては貴様、今日来るはずの「盾の一族」を名乗

る不届き者だな!？」

修正、普通。

「聖王陛下にたて突く愚か者め!　そこになおれ!　無礼討ちにしてくれる!」

前言撤回、責任者でてこい!

side レジラスと愉快的側近達

会議室にはレジラスを含め、地上本部を實際に取り仕切っている幹部達が一堂に会していた。定例会議とその後の会食の為である。

「しかし、織部君は自分の価値を理解しておらんようだな」

「まあ、そう言っな。魔法が無い管理外世界から来た……、いや、あの手口は拉致だな。とにかく突然こちら側に来たのだ。理解しろ

というのは少々酷だ」

会議だと言うのに話題はもっぱら織部まもるについてだった。

「そんなことよりも魔導鎧まどうよろいですよ！　これが実用段階になれば大幅な戦力アップが見込めます！　彼には是非とも技術開発部へきて頂きたい――！」

鼻息荒く白衣の男がまくし立てる。格好から技術畑の人間だと見て取れるこの男は、まもるを自陣に引き込もうと必死だ。

「だがな、彼の戦闘力、取り分け継戦能力が高いから陸士部隊に配置した方が良いと思うのだよ」

それに対し、ぴつちりと隊士服を着込んだ初老の男が反論する。その姿、威風堂々。正しく歴戦の勇士である。

「中将のお考えは？」

この場を収束させようと動いたのはオーリスだ。親子という間柄ではあるが、公式の場なので階級で呼び合う。

「俺か？　そうだな――」

目を瞑り、腕を組んで考え込むレジアス。彼が考え込むときの癖だ。顔の俯き具合で問題の深刻度が分かるそれは、現在MAXになっている。つまり真下を向いている。

「中将はまだ考えが纏まっていらっしゃらないようなので、今日の所はこの辺で――」

「いや、まて」

閉会を宣言しようとしたオーリスを止めたのは、他でもないレジアスだった。

「始めに言ったように、俺が一番評価したのは『発想力』だ。管理外世界、魔法が無い世界から来た彼は我々の常識では測れないものを持っている。我らが気がつくことが出来ないことを彼なら指摘できるかもしれない」

「それはみな重々承知しております。だからこそじっくり育てるべきで——」

「それでは遅い。遅いからこの際思い切った手段をとっていこうと思う」

「……思い切った手段とは？」

「気が付き、指摘さえしてくれれば我らでも修正できるのだ。だから全ての部署を回してもらおうと思う」

「そんな無茶な！」

「無茶は承知の上だ！ 問題が出きったところで技術部に回して魔導鎧まどうこうの開発に着手してもらおう」

「では最終的な所属は技術部ということに？」

「それも違う。魔導鎧まどうこうの開発と平行して小隊規模の実験部隊を率

いてもらい、完成後、その小隊を発展的解消して大隊規模に押し上げる。つまり、彼には最終的に指揮官兼技術仕官になってもらう、ということだ」

なんとも壮大な計画である。

まもるが途中で潰れるか、辞めてしまったら白紙に戻ってしまう計画だが、全ての部署に旨みがあるいいところ取りの計画だ。しかし、彼の負担を考えると頷くのを躊躇ってしまうのも事実。

「——本人に了解を取る必要がありますね」

「「「「「うむ、当然だな」「」「」「」

オーリスが締めたところで全員が頷いた。
団結力はなかなかのようである。

「——ところで、大隊まで押し上げるのにどのくらいの期間を想定しているのですか？」

「ん？ そうだな、……だいたい二年つてところか？」

「「「「「そんな無茶な！？」」「」「」「」

訂正、団結力はピカイチだ。

side 自称サラリーマン主人公

「『盾の一族』を騙る愚か者め！ 死んで詫びろ！」

「ガッツツツ！？」

左肩が剣で貫かれた。血がどくどく出てる。とても痛い。
いやいや、打開策を考えないと！

「ハハハハハッ！ この俗物が！」

ズシュウ

「ギイツツツツ！？」

今度は右腿を貫かれた。やべえ、パラディンを纏う暇が無い。

「管理外のド边境からわざわざ殺されに来るとは、ホントおめで
たい奴だよ！」

—— おい、今なんて言った？

—— ”わざわざ殺されに”だと？

（おい次元刀）

（……やるのか？）

（ああヤル。だから力を貸せ）

（心得た）

俺は来たくてここに居るんじゃない。

どっかのバカ達が強引に連れてきたんだ。ご丁寧に逃げ場まで潰してな。

それをこともあろうに”わざわざ”だと？

堪忍袋の緒が切れた！！

てめえらは絶対後悔させてやる！

いいか！？ 絶対だ！！ 絶対にだっ！！

08 ついに実力を……（後書き）

部隊規模は「大日本帝国陸軍」の構成を参考に考えています。
最小単位は分隊で10名前後、小隊は4分隊＋小隊長直下の兵員で60名前後。中隊は3個小隊＋中隊長直下の兵員で190名前後、大隊は4個中隊＋砲兵の小隊ないし中隊で以って1150名前後。
この小説ではこれの2/3ぐらいを考えています。

09 これも実力のうち？（前書き）

今回は非常に難産だった。

多分今後は難産続くと思う。

09 これも実力のうち？

まもるは戦巧者ではない。

しかし、例の策を実行するには相手の隙を突くことが第一条件になっっている。

ズブシュツ、ギチチ

「んぎゃっ!？」

先ほど挟られた左肩にもう一度切っ先が侵入した。今度は穴を広げるように、大きく剣先を動かしてゆく。

「なんだ？ もう抵抗はしまいか？ つまらんなあ……」

そういいながらグリグリと、そして楽しそうにまもるを捌る騎士とおぼしき男。血走った、どこか狂信を髭髯とさせる瞳がそこにはあった。

不意に男の剣が持ち上がる。

そして、一気に体重をかけて下ろされる。

ゴギンッ

「が……が……」

骨が完全に断たれた。まだ辛うじて体と繋がっているが、それは皮膚や肉ばかり。最早それはまもるの左腕とは言えない状態になっていた。

（まもる、それを使え）

（そ……れ……？）

（お前の傍に転がっているそれだ）

（お……れの……う……で……？）

（否。それはもうお前から離れている。今はただの”肉”だ）

切断の痛みの所為で、半ば意識が朦朧としているにもかかわらず一瞬の逡巡を示す。それもそのはず、”使え”といわれているものはつい先ほどまで自分の左腕であったものだからだ。即座に行動に移せる人間というのは狂人ぐらいなものだろう。

そしてまもるは決断する。

右手を、自分の傍に転がる”肉”に這わせる。顔にはまるで『信じられない物を見た』と言う表情を貼り付けながら。

襲撃者はそれをニヤニヤしながら見つめている。恐らく、彼の目にはまもるが『腕が切り離された事実を受け入れることが出来ていないで呆然としている』と映っているのだろう。勘違いも甚だしいが、そうして油断してくれた方が都合がいいので演技を続ける。

右手を切断面から肘、手首へと撫でるように移動させていく。言葉は発しない。そのほうが雰囲気が出るからだ。

「ヒヤハハッ！ お前はバカか！？ もうそれとれて——」

ブヂイ

”肉”の手首を掴んで、残り僅かな繋がりを一気に上へ引き千切る。男の顔に血がかかり、フラフラしながら数歩あとづさる。どうやら目に血が入ったようだ。

だ距離が近い。

———しかしま

そう判断したまもるの行動は素早かった。

右手側に転がり、左足と”肉”を掴んだままの右手を使ってフラフラしながらも立ち上がると、怨敵に向かって叫ぶと同時に右手のものを投げつけた。どこか現実離れた自分の状態に痛みは麻痺し、必要以上にテンションが上がっていた。

「人力投射、生ロケットパンチ!!」

ベチッ

いい具合に回転が加わり、投げたそれはくの字になって相手の首にめり込む。どうみてもラリアットであった。

「もとい！ 新鮮ロケットラリアット!!」

まもるの訂正は男に届かず、ただ予想外の攻撃に混乱し、その衝撃で咳き込んで自分から距離を開ける。

「次元刀。任せた」

「任された」

短いやり取りの後、次元刀が地面に落ち、突き刺さる。

そしてゆっくりと大地を裂いていく。

その動きは、熱したナイフでバターを切るように滑らかだ。

「クソッ！ どこに行きやがった！？」

矢鱈目鱈に剣を振り回す、返り血とまもるに浴びせられた血で真っ赤に染まった男。それを見ながら、裂け目に沈んでいくまもるは大きな声で宣言した。

「いいか！ 十倍だ！ この恨みは十倍にして返してやる！！
てめえーも！ 聖王教会も！ この件に関わったもの全てだ！！
覚えていやがれ！！」

最後に、震える右手の中指を目の見えていない相手におっ立てて、まもるは裂け目に沈みきった。

その闇に溶け込むかのように、まもるの意識も沈んでいった。

side レジラス親子

突然だがレジラスは窮地に立たされていた。将来を囑望された新

人が行方知れずになったからだ。

行方の分からない新人の名前は「織部まもる」。人格はどうかまだ分かっていないが、魔力資質はAで指揮官の適性も持ち合わせている。さらにA級デバイスマスターの資格も取得しており、古代ベルカ式の魔方陣とおぼしきものを展開したことから、なにがしかの希少能力レアスキルも所持しているのではないかと目されている。

そんな稀有な人材が、入隊前のお使いに行ったきり戻ってこないのだ。

「あれから二週間……。一体君は何処で何をしているのだ……」

まもるが消息を絶って二日経過すると、管理局はこの一件を誘拐と断定した。彼の斬新な発想力。また、それを再現できる技術力と、古代ベルカの系譜の魔法。身代金目当てではなくとも、攫われる理由は十分すぎるほどあった。

「こんなことになるな強引にでも車に乗せればよかった……」

「お父さん……」

頭を抱えるレジアスに、それを心配そうに見つめるオーリス。彼らの目の前には大量の抗議文、いや、非難文や告発文とも呼べるものがあつた。

「海」や「空」は主にどう責任を取るかについて。

素直に聖王教会の意向に従ったために起きた事件であり、それを拒否すればそもそも発生しなかったことだ、という意見がその根幹を成す。いろいろな政治バランスを考えればたどり着かない結論なのに、これ幸いにとレジアスの影響力を削ぐ為にこういった嫌がら

せをしているようだ。

そして大半を占めるのが聖王教会からのだ。

古代ベルカを知るかもしれない貴重な人材を、護衛もつけずに一人で歩かせたことへの弁明を求める一方で、今回の責任は地上本部側にあると決め付けている内容である。聖王教会の至上目的は古代ベルカの遺産を収集、保護することで、今回の事件はそれを邪魔されたと認識しているらしい。書類の中には「聖王陛下への侮辱行為だ」とか「聖王教会への宣戦布告に等しい」などの過激なものも多々ある。

「はあ……」

ため息にも生気が感じられないほど、レジアスは精神的にまいっていた。

このままでは良くて降格、悪ければクビだからだ。

「……はあ」

もう一つため息をついたところで来客を告げる呼び鈴が鳴った。

ピンポーン ピンポーン

「……私が行きます」

立ち上がろうとしたレジアスを制してオーリスが立ち上がる。

二人とも、どうせ追加の抗議文だとアタリをつけていた。そのために彼女の足取りもどこか重い。

「ゲイズさん。お届け物です」

「はいはい、今開けますよ」

扉を開け、小包であろう荷物を受け取ろうとしたオーリスは固まった。

「え？　なによこれ……」

オーリスの目の前にはとても大きな木箱が鎮座していた。

おおよその大きさは縦が2メートルで横が70センチ、奥行きが50センチといったところだろうか。具体的には、——人一人分といったところだろう。

とりあえず一人では運べない為、配達に来てくれた人に居間まで運んでもらう。中の物が固定されておらず、重心がころころ変わるようでも運び辛かったようだ。

居間に着く頃には、オーリスの戻りが遅いことが気になったレジアスも合流していた。

「……なんだこれは？」

「……さあ？」

疑問に疑問で返答せざるを得ない。

とにかく中身を確認しようと二人が近づいたその瞬間。

ガタガタッ

「「！！」」

不意に木箱が揺れる。

そしてスライドしていく蓋。

何かが出てくる！

そう感じた二人は真っ先に聖王教会の過激派が殺しに来たのではと考え、最大限に警戒し始めた。

レジアスは娘を守るために背に隠し、オーリスは父の影で木箱の動向を探る。

そして木箱の隙間から鉛色の腕が出てきて蓋を掴んで一気に押し上げた。

「あ、どこいしょういち……っ」と

「「あ……」」

「ん？ あれ？ レジアス中將にオーリス一尉？ なんでここに？」

「……それは私らのセリフなのだが……」

中から出てきたのは、二週間前から行方知れずになっている織部まもるだった。

09 これも実力のうち？（後書き）

短い上に、今すんごくねむいので誤字脱字が多かったと思う。
おまけに前回のサブタイと今回の内容とサブタイがずれているような気がしなくなってもない。今後読み返して修正する可能性”大”だなあ……。でもめんどくさがってやらなさそう。

突然アンケート

以下のもので一番男のロマンを感じるのは何ですか？

？ロケットパンチ

？ドリル

？銃

？その他

回答してくださった方の中から抽選で一名様に豪華商品が当たる”
ワケはない”ので特に回答しなくてもいいです。
ただ、今後の参考にさせていただきます。

今回も分量の少ないヘタレで申し訳ありません。

10 現状確認（前書き）

遅くなりました。

申し訳ございません。

10 現状確認

簡潔に現状を説明しようと思う。

お使い開始

←

騎士に襲われる

←

左腕を生贄に捧げトンスラ

←

どこかの博士に助けられる

←

次元刀と博士が取引したらしい

←

特殊義肢装着&俺復活

←

目が覚めて三日後「知り合いに送るから」といって箱詰め

←

ゲイズ宅に到着

←

尋問開始 ↑ 今ここ

こんな感じです。

「たしかに知り合いに送ると言っただんな？」

「え、ええ、まあ……」

なんだろう？

ものすごく中將が怒ってらっしゃる。

なにかマズイことでもしてしまったのだろうか？

「それで？ 確かに襲ってきたのは騎士なんだな？」

「はいそれはもう。『聖王様がなんとかかんとか』って言っていましたし、まず間違いありません」

あれは絶対に騎士でしょ。

ベルカ自治区に居たし、剣振り回してたし。なにより魔方陣が三角形の中心に剣十字が回る、近代ベルカ式か古代ベルカ式のものだったしね。あんなところで『自分は騎士じゃないっす』とか言われても説得力が無い。

「なら聖王教会の方は大丈夫だな。あとは「海」と「空」の連中か……」

ん？ なんだ？ 俺がいない間に何が起こったんだ？

「あの……、自分がいない間に何か起こったんですか？」

「ああ、お前は当事者だったな。これはすまない。かいつまんで言うと、この二週間お前は死亡に近い行方不明扱いだったのだ。それでこういう事態になった責任は誰にあるのだ？ ということにな

つて、地上本部、とりわけその上層部が槍玉にあげられてたワケだ」
なるへそなるへそ……。

でもなんで俺がいなくなっただけでそんな事態に発展するんだ？

「その顔は『なぜ自分がいなくなっただけで？』って顔だな？」

「フヒイ！？ な、なぜお分かりになっただけ？」

「顔に出ておる！ …… まあいい。この際だから言うが、お前はどの陣営にとつても魅力的なのだよ。新機軸のデバイスを考案する発想力、A級デバイスマイスターの資格を取得した技術力、模擬戦で見せた高い指揮官適性。そして、その身に宿す古代ベル力式……と思われる魔法。どれをとつても所属した陣営に多大な益をもたらす。……スカウトがしつこかったのもそのせいだ」

へー、そーなのかー。

つて、ハアツ！？

「なんですかそのデタラメな評価は！？ 過大評価過ぎますよ！
」

「おまけにだ！ 魔力資質がAランク、しかもお前はまだ若いからまだまだ伸びるだろう」

「A級デバイスマイスターも魔力資質Aランクも事実だからいいとして、発想力やら指揮官適性ってなんですか！？ あんなもの一般人レベルでしょう！？ それに俺の——……あー、自分の魔法は古代ベル力式ではありません」

しまった。あまりの過大評価に中将閣下にむかってしてはいけない口のききかたをしてしまった。

堪忍や！ 堪忍やからそんな目でみないでー！

「――では、なんなのだ？」

「は？」

「古代ベルカ式ではないのならなんなのだと聞いておる」

しよ、正直に答えても言いのだろうか？

ギヌロツ！

ヒ、ヒイ！

「べ、ベルカ式の原型、源流とも言えるものでありますっ！ サ
ー……」

あまりの迫力に直立不動で敬礼してしまったぜ！

「……」

この沈黙は痛い。ヒジョーに痛い！
お願いだから何か言って！！

「……ハア」

なんでそこでため息なのさ！

もうこれ以上イジメないで。俺のライフはとっくに0よ！

「……あなたはビックリ箱のような人間ですね」

オーリスさん、それはヒドイっす。例えば人ですらねえ。

「……もうないな？」

「へッ？」

「もう隠し球的ななにかはないかと確認している！」

あー、えー、これは言っておいた方がいいのかな？

あとでバレたらえらい目に遭いそうだ。

「……あるのだな？ キリキリ吐け！」

「あつと、その、こちらでいう希少技能^{レアスキル}っぽいものが一つ……」

あ、二人ともソファーに沈んだ。

明らかに影背負ってるし。

俺、悪いことしたのかなあ？

ややあつて。

「……オーリス、俺は疲れたから寝る。こいつを一番奥にある客室に叩き込んでお前も寝ろ」

「……はい。では織部さん、こちらへ。私もさっさと寝たいので早く動いてください。ほら早くっ！」

「ハ、ハイ」

そんなに急かさなくてもいいじゃん！

ってゆーか帰る気満々だったのに。お泊り強制ですか？　ねえ、強制ですか？

「——ウゴケ」

「ハイ喜んで!!」

「ここよ。はいつて」

「はあ」

一歩踏み出して確認。

机が一つ。ベッドが一つ。天窓が一つ。照明が一つ。

客室に見えん。

「あの、オーリス一尉？　ここって本当に客室なので――」

ギィッ、バタンッ

ガチャン

ガッコン

ジャラジャラ

カシユン、ガチン

「では、おやすみなさい」

カッカッカツ……

「……」

えーっと。俺って寝る前には必ずトイレに行く派なんだよね。
だから寝る前におトイレいこつと。

ガチャ

「あれ？　なんで開かないの？」

ガチャガチャ

「……」

どう見ても監禁です。

本当にありがとうございました。

「お月様、キレイだなあ……」

10 現状確認（後書き）

短いすね。

重ね重ね申し訳ございません。

11 浪速のうさぎ(前書き)

投稿が遅れた理由は古いゲームに嵌ったこと。
知っていますかね？

「ガンダム トウルーオデッセイ」 ってヤツなんですけど

11 浪速のうさぎ

まもるがヒヨツコリ帰ってきて一晩過ぎた。

現在の時刻は午前七時。一般家庭ではそろそろ活動を始める時間帯だ。そして、このゲイズ宅でもそれは例外ではない。

「——はふう、おはよう、お父さん」

「ああ、おはようオーリス。そろそろ朝ごはんだから早く顔を洗ってきなさい」

すでにレジアスの妻は亡くなっており、親子二人で家事を分担して暮らしている。権力があり、地位もあるレジアスだが家庭内では良き父であるようだ。仕事柄、忙しいにもかかわらず自分の分はしっかりとやる辺り、その人格が窺える。ちなみに家政婦やお手伝いさんは雇えない。持ち帰る書類などはあまり人目に晒してよいものではないからだ。ドアの隙間や植木の陰から、「あらいやだ」とか「大変、どうしましょ」なんて覗かれてはたまったものではない。

「そうだオーリス、ついでに彼も起こしてきなさい」

「……起きたら降りて来るんじゃないかしら？」

「ちゃんと外から戸締りしたのだろう？」

「……そういえばそうね。じゃあ見てきます」

ここでふと、オーリスは昨日彼に案内した部屋は自分の母が主に使用していたのを思い出す。もちろん目的は閉じ込める為だが犯罪

目的ではなく、悪いことをした人物へのお仕置き、いわば教育の為の設備なのである。建前は。

通算で一番長居したのは父レジアス、次に娘オーリスだ。といってもオーリスは2、3回入っただけで、レジアスは月一で入っていた。ベテランともいえる。

コンコンッ

「織部君、起きてますか？」

ドアをノックしながら声をかける。しかし返事は無く、まだ寝ているようだ。

直接たたき起こすべく、昨日施錠したのとは逆の南京錠、鎖、門、普通の鍵という順で開錠していく。

最後の鍵を開けドアを開けると、案の定まもるはまだベットで寝ていた。その安らかな姿が、昨日までの自分達の気苦労の元だと思うと、オーリスは無性に腹が立った。

せめてもの仕返しとして、胸を思い切り叩いて驚かしてやろうとソロリソロリを忍び寄るオーリス。拳を握り、大きく振りかぶって、最後の一步を踏み出す。

ガタン

その一步がイスに当たり、その上に置いてあったモノが転げ落ちる。

ボスン

布でくるまれたソレは棒状で、真ん中付近と片側の端っこあたりでそれぞれ一回ずつ折れている。三つの部位の一番小さいものには

さらに小さく細長いパーツが五つ付いており、それはその部位の中心に向かって曲がっていた。

「——なに、これ？」

足をイスに当てなければよかったかもしれない。

叩き起こそうと思わなければよかったかもしれない。

そもそも、この部屋に入らなければよかったかもしれない。

かし、もう遅いのだ。

——し

「ヒイツ、イヤアアアアアアアアアア！！」

オーリスの見たもの。それは紛れもなく人間の腕だった。

「誠に申し訳ありませんでした」

俺は今猛省中である。その心内を表現する為に土下座までしている。

理由は今朝オーリスさんに少々グロイモノを見せてしまったからだ。具体的には左の義手と肩の接続部分。

昨日監禁された後に、義肢を外して簡単に整備してから寝たのだが、机とかに油が染みるのを防ぐ為に丁寧^{ていねい}に布を巻いたのがいけなかったらしい。白い布に黒い油染みが、起きたばかりで認識力の低

下したオーリスさんには、包帯とそれに付着した血に見えたそうだ。彼女側に露出した肩の接続部分も同上。そんな認識で見られたら、そら悲鳴の一つや二つ上げるもんさね。自分の家でホラー現象が起きたようなもんだし。

「い、いえ。こちらこそ取り乱して申し訳ありません」

ああ、この人良い人だあ。

「オーリス、織部君。さつさと朝飯を食ってくれ。片付かない」

レジアス中将。家庭でのあなたはなんかちがいますね。
なんかこう「親父殿！」と呼びたくなってきた感じがで。

「ああ、それとこれは隊士服だ。今日はこれに着替えて我々と一緒に出勤するぞ」

「はい、わかりました」

かっこいいね、隊士服。

何処に所属するのは知らんけど、制服なんてどこも似たり寄ったりだし、部隊の区別つけるのは精々部隊章のワッペンぐらいですよ。

地上本部までは車で行きました。
中将曰く、

「普段はモノレールだが、また襲われたらかなわん」

とのこと。

俺だって好きで襲われたわけじゃないやい！

で、着きました地上本部。

自分の体感時間で四日ぶり、実際の時間で二週間ぶりといったところだ。そんな短時間では変わりようがなく、今日も立派な建物がデーンと聳え立っている。

「中将、おはようございます」

レジアス中将の姿を確認したとたん、群がってくる人、人、人。老若男女問わず挨拶を受けるその姿はさながらアイドルのようだ。出待ちならぬ着待ちといったところだろうか。それに片手を軽く上げて返事をするレジアス中将はかなりカッコイイ。本当に「親父殿！」と呼んではだめだろうか？ ダメですね。すいません。

中将の後にある種の貫禄すら漂わせながら続くオーリス一尉と、なんか場違いだなーと思いつつおっかなびつくり歩く小市民な俺。周りの視線が「オメー誰だよ」と如実に語っており、それがますます肩身を狭めていく。

ホントになんで俺はこんなところにいるんだろう？
順調なら今頃、名古屋あたりで味噌カツウマーとか言ってるはず
なのに……。

周りの視線に耐え切れなくなって、現実逃避を始めた頃にそいつ
らは現れた。

「ああ、騎士マモル！ ご無事でなによりです！」

騎士カリム。

俺の左腕が鉛色になった原因の大多数を抱える人物。
いわば怨敵とも呼べる存在だ。

side 箱入りお嬢様

カリムが織部まもるの無事を知ったのは今朝のことだった。

いつものように朝の祈りを終え朝食を取っていると、自分の付き

人であり友人でもあるシスター・シャツハが勢いよく飛び込んできたのだ。いくら猪騎士でも礼節に欠く行動はしない彼女がここまで取り乱すのだ。よっぽどのが起きたのだらうと、食事を中断してまで彼女の報告に耳を傾けた。

そしてそれは実際に驚くべきものだった。

織部まもるの生存の確定情報。行方不明から二週間経過し、もう生存は絶望的だろうと思われていた矢先にこの朗報。カリムは神に、聖王陛下に感謝した。

そうとなれば善は急げ。朝食を手早く片付け、午前の予定を全てキャンセルし、マモルに会うために地上本部へと車を走らせた。

今回の事件は全て地上本部の失態である。それが時空管理局の「海」と「空」、聖王教会の共通認識だ。カリムもそれには同意している。始めは純粹に「陸」を非難していた。古代ベル力を知るかもしれない人物を簡単に失ったからだ。しかしそれはマモルの帰還によって感謝に変わった。これを利用してマモルを管理局から引き離し、聖王教会騎士団に引き込もうと瞬時に思いついたからだ。彼と感情のある人間だ。間接的とはいえ自分を害した組織に所属しようとは思うまい。

手元に引き入れたら騎士としてしっかり教育し、しかる後に、妹分が構想中の予言対策部隊に「騎士枠」として送り込むことも出来る。

聖王教会は優秀な騎士を迎え、妹分の部隊設立にさらなる援護が出来る。ついでに管理局の勢いをそぐことが出来ると言い事づくめだ。これでマモルが古代ベル力について何か知っていたら言うことはない。

獲らぬ狸の皮算用と思われるかもしれないが、だいたいこのように進むだろう。あとは細かいところでへまをしなければいい。

最初は挨拶だ。これで好印象を与えればその後の展開は容易になる。

爽やかな笑顔で接しようか。それとも、目を潤ませて「心配しました」と抱きついてみようか。そんなことを考えているうちに、騎士カリムは地上本部に到着した。

管理局に出向している騎士から、ここにマメルが来ているという報告はすでに入っていた。ここで所在を確認してから訪ねようと思っていたが、これはこれで好都合だ。

彼はどうにも流される節がある。魔法という存在を知ったときも、ミッドチルダに来たことも、引き返すことも出来たのに彼はそれをしなかった。退路を塞がれたことも大きいが、カリムは『その場にマメルが存在しても良い』、という明確な理由が存在する^{レンデール}かしないかが一番重要だと考えていた。要はキッチリと彼の存在価値を提示してやればよいのだ。

あとは簡単だ。

管理局にはそれがないように思考誘導し、聖王教会にはあるように語ればいい。

自分にはそれができる。そう言い聞かせながら、カリムは道を進んだ。

地上本部の入り口が近づくにつれ、人の密度が高まる。

それを掻き分けるようにシスター・シャッハが進み、彼女の後に騎士カリムが続く。

暫く進み、人垣が出来ているところに割って入ると、目標の人物がいた。

「ああ、騎士マモル！ ご無事でなによりです！」

誰もが見惚れるような笑顔だ。マモルも突然の出来事に呆けた表情をしている。

それを見てカリムはもらったと確信した。

さらに追い討ちをかけるべく、抱きつこうと接近する。

見目麗しい女性が生還した男性に抱きつく。昔から広く使われていた陳腐な愛情表現だが、衆人環視の中でそれを行えば二人の仲は非常に良好だと認知される。そこからはデキレースだ。

しかし、彼女の思惑は脆くも崩れ去った。

「ふざけたことぬかすんじゃないねえっ！！」

バキッ

近づくカリムをマモルが殴ったからだ。

鋼鉄の義手を左の腰だめから右の上方に打ち出す、ボクシングのスマッシュに似た軌道で振りぬいたのだ。

それは的確にカリムの顎の右あたりを捉えた。

そして彼女は錐揉みしながら宙を舞った。

11 浪速のうさぎ（後書き）

とりあえず殴るのは前々から決まっていた。右か左で悩んで、結局痛そうな左にしました。カリムLoveの皆様、平にご容赦ください。

次回はマモル無双できる……、といいなあ。

指摘されたので訂正。

スカッシュ↓スマッシュ

スカッシュは壁テニスでした。

12 上下左右、加えて前後に無双（前書き）

眠い。非常に眠い。

12 上下左右、加えて前後に無双

やつちまった。俺の中にはそんな気持ちで一杯だった。

恐らく俺は犯罪者として追われることになるだろう。訓練校の友人や親友のティード、名も知らぬ正義の為に働く多くの局員から逃げ回る逃亡生活が容易に幻視できる。いや、むしろここで現行犯逮捕になるかもしれない。

それでも。それでも俺は、自分の行動に後悔はなかった。

あの騎士はもとより、聖王教会も俺の敵だ。

自分達で襲っておきながら今の態度。謝罪も弁明もせず、会った瞬間に「ご無事でなによりです」だと？ ふざけるのも大概にしろ

！俺は無事じゃねえ！！

なにより誓った。

あの日、あの時、あの場所で。

左腕と泣き別れ、鋼鉄の左腕を迎えたときに。

そしてもう一度誓おう。

俺の存在を否定するこいつらは敵だ。

俺とは決して相容れない、間違っことなき敵だ。

だから纏う、守護者の甲冑を。
今しばらくは己自身を守る守護者として。

「パラディン、顕現！」

俺の本質は守ること。
それに自分自身が含まれても、なんら不思議はない。

暫くして、

「騎士カリム！ 大丈夫ですかっ！？」

護衛とおぼしき女騎士がカリムの傍に駆け寄る。彼女は焦点の合
っていない目で女騎士を見上げている。

顎にもの凄くいいのが入ったのだ。今、この恥知^{カリム}らずの世界はグ
ルングルン回っていて最悪だろう。同情するつもりは毛の先ほども
ないがな。

「き、貴様！ なんていう事をしてくれる！？ 騎士カリムは貴

様のことを心底心配していたのだぞ！！」

自分達で襲っておいて心配とか、どんな茶番だよ。

俺は黙して語らず、ただ目の前の敵の動向を窺った。

「それでも騎士かつ！？」

俺は騎士じゃない。守護者だ。

そう思いながら左腕の甲冑を部分解除してゆるい布に変更する。
これで準備は完全に整った。

「言葉すら吐けぬか、この下郎！ もういい！ このシャツハ・
又エラが人誅を下してくれる！！」

叫びながらデバイスを起動する恥知^{カリム}らずの付録。

双剣型の形状から、戦闘スタイルは接近戦での連続攻撃だろうと
推測する。機動力の低い奴にとっては天敵と呼べるようなスタイル
だろう。しかし、パラディンと先人の知恵を継承している俺には全
く通用しない。

脇を締め、腕をたたむ様に構え、文字通り猪のように突っ込んで
くる付録。

問題はない。しかし、確実に捌けるとわかってはいてもそれでは
面白くない。

よって、先手は俺が頂く。

「飛べ！ アームジョー！！」

左腕を突き出し命令を出す。俺の言葉に答え、肘から先が銀色の
魔力光をたなびかせながら付録に向かって射出され、首を掴むよう

に激突する。

「な！？ グウ！！」

腕が飛ぶ。そんな非常識で全く予想がつかない攻撃に対応できる道理はなく、まともに喰らう付録。

「な、なんのこれし——ガァ！？」

使い捨ての奇襲武器だと思ったのだろう。振りほどこうと腕を上げたときに、首を掴むアームジョーの力をさらに上げた。掴むというより締めると言ったほうが正しいかもしれない。

そして掴んだままの状態で推進力のベクトルを変え上昇させる。

「ガハァ！」

そのまま天井へ叩きつけ、

「か……はっ……」

返す刀で今度は床に打ち下ろす。

「お、のれ——ギイツ！？」

もう一つオマケに、離れたアームジョーの手のひらから出される小さい砲撃で両膝を薙ぎ払っておく。

これで暫くは機動力を殺せるだろう。

一先ず左の義手、特殊義肢型デバイス「アームジョー」を戻して、両手でしっかりと巨大な盾を自分の前に保持し、堂々とした態度で

仁王立ちした。特に意味のない行動だが、這いつくばってる二人を見ていたら無性に格好をつけたくなったのだ。別に俺はSというわけではない。むしろ微Mだ。好きな女の子とかになじられたらちょっと気持ちよくなっちゃう。でもちよつとだから問題ない。

それはさておき。

恥^{カリム}知らずと付録^{シャツハ}はダメージで動けず、俺は少々悦に浸っていたので動かない。なんとも消極的な膠着状態が出来上がった。

そろそろ周りが動きそうな気がする。

そんな気配を感じた俺は、この二人を文字通り叩きのめすべく一歩踏み出した。

その瞬間、付録^{シャツハ}が床に沈むように姿を消した。

逃げたか？

初めはそう思った。しかし護衛対象をほっぽり出して逃走するとは考えにくい。何よりあいつは猪だ。しかも人誅とまで叫んでいる。そうになると、見えないところからの奇襲が考えられる。

だが甘い。

盾を軽く上げ、勢いをつけて打ち下ろす。

床が砕けるが気にしない。この動作が発動条件だからだ。

「^{ゴスベル}絶対聖域発動」

俺の^{レアスキル}希少技能、『^{ゴスベル}絶対聖域』。

自分を中心として最大半径100メートル程が自分のテリトリーになる結界を球形に形成する。対象に重圧をかけ能力を低下させたり、逆に一時的に高めることが可能になる。その他には、敵対しているものが異物として術者に認識されるなど、その能力は幅広い。

もちろんリスクはある。

動きが鈍くなるのだ。正確に言えば移動速度が極端に鈍る。それこそ鈍重な亀のようになってしまふのだ。それ故に、盾の一族の戦闘スタイルはカウンターに比重が置かれている。

自分から攻撃できないから相手を誘い込み、プレッシャーをかけこちらの土俵に引きずり込む。そして攻撃をいなし、はじき、受け止め、——しかる後に盾で叩き潰す。

今回のケースは俺にとって必勝パターンといえるものだろう。^{シャッハ}付録が不憫で仕方がない。

どうやら俺の右後方の床、1メートル下辺りで勝機を窺っているようだ。回り込んでその位置についてから全く動かない。

大方、俺が逃げたと判断してパラディンを解くのを待っているのだろう。だがこちらは貴様を認識している。だからそのような事態

にはならない。

しかしこのままでは千日手だ。
仕方がないからボディガードの習性を利用して炙り出させてもらう。

視点が定まらず、まだ尻餅をついている恥知らず^{カリム}に向かって一歩を踏み出す。

続いて二歩目。

ここで漸く近づく俺に気が付いたのか、ふらつく足で立とうとする恥知らず^{カリム}。しかしダメージが深刻でそれは俟たない。

さらに三歩目。

手を使って必死に逃げようとする。滑稽だ。

そして四歩目。

床下の付録^{シャッパ}が動いた！

「隙アリッ！！」

「そんなもんねーよ！！」

すぐさま対応。双剣を右手のみで振った盾で受け止め、その勢いを殺さずに叩きつける。ここで決着をつけるべく、それと同時に仕掛けを施す。

「グウ……、—— なっ！！ 動けない！？」

盾ごと付録を^{シャツハ}バインドで縛り上げてやった。
^{プレッシャー}ついでに重圧をかけてそれを破る力も奪っておく。

「さあ、お楽しみの時間だ」

取っ手の位置を下方にずらす。

それを掴んだら後はひたすらレッツスタンプ♪

ダン ダン

ダン

ダン

ダン
ダン
ダン
ダン
ダン
ダン
ダン

ダンダンダンダンダンダンダンダンダンダンダン
ンダン

チヤ力チヤ力チヤ力チヤ力

大きく振りかぶって……。

チヤ力チヤ力チヤ力チヤ力

ダ
ア
ア
ン
！

—ニキイ—

「どうやらどこかの骨が逝ったようだ。これでもう抵抗はないだろう。」

バインドを解きながら恥知^{カリム}らずの方へ放り投げる。
うまく受け止められず二人して這い蹲る。奇しくも先ほどの膠着
状態に戻った。

一ヶ月ぶりにヌイたくらいにスッキリした。
肉体的に痛めつけ、俺の優位性は確保された。今度は精神的な優

位性を獲得しよう。

受けた恩は倍返し、受けた仇は十倍返し。これが俺のジャスティス。

ついでに周囲にもそれとなく、「俺も被害者ですよ」という空気を作っておこう。

そうすれば後々有利になるかもしれない。

いや、きっとそうなるに違いない。

「デデン♪ くえすちゃんわ〜ん！」

ん？ この芝居はなんだって？

ギャラリィに現状を説明する為だよ！

全員で同じことを考える、集団心理を逆手に取った思考誘導ともいえるがな。

「俺は何処で行方不明になったでしょう？ ヒントは当時の行動予定です」

「——あ、——クラ」

「ブブー。はい時間切れー。正解は『ベルカ自治区東門付近の林道』でした」

俺の回答に恥知らずの顔がみるみる青ざめていく。

それもそのはず。俺が言った場所は聖王教会の管轄内だ。責められるならまだしも、陸上本部を責める材料にはなり得ない。

「デデン♪ くえすちゅんつう〜!」

周りの局員も俺が真相を語っているのだと知り耳を傾けてくる。
いいよいいよ〜。このままいけば俺の罪が多少なりとも軽くなる!

「俺の手はなんで鉄で出来ているのでしょうか? ヒントは行方不明になった現場でーす」

「それは誘拐犯に」

「ブッブー。ハッズレー!。『教会騎士に切り取られた』が正解でした〜」

「ッ!〜!」

俺の言葉を聞いて呆然としている。どうやら自分のしでかした失態に思い至ったようだ。

そうだ、俺はお前らをボコる理由がある。

しかし、現場に俺の左腕は転がっていなかったのだろうか? 消えたとしたら何処へ? 謎だ……。

「デデン♪ らすとくえすちゅん!」

いい感じに周りの同情が集まってきた。
もう少しだ。もう少しで、今回の暴力は当然の行動と認識される。

「左腕を切り落としてくれた騎士は俺と遭遇したときになんて言ったでしょう? ヒントは盾の一族でーす」

「……………」

何も答えない。声すら出さずただ視線を落していた。
希望を見出すことすら諦めてしまったようだ。やはり箱入りお嬢様だな。

「ブッブー。時間切れです。正解は『不屈き者』『わざわざ殺されに来た』『一族を騙る愚か者』『死んで詫びる』等々、とても客人に送る言葉とは対極のものでした」

あちらこちらからヒソヒソ話が聞こえる。

もともとあまり好かれていない聖王教会だ。今回のことで、少なくともここに居る局員は教会を敵視するだろう。

少々せこいが、兎にも角にも俺の立場は相対的に良くなったはず。少なくともいきなり犯罪者ということはないだろう。

一応、作戦成功。というところで今回はこの辺かな？

ところがギツチヨン！

「えくすとらくえすちょん！」

それは局員に対してのみで教会騎士は対象外なんだぜ！
俗に言う「まだ俺のターンは終わってないぜっ！」って奴だ。

さあ、本格的に絶望する時間だよ。お二人さん。

12 上下左右、加えて前後に無双（後書き）

擬音だらけのところは「めっちゃイケ」の、ダイスを振って出た目の人物がハリセンで叩かれるコーナー「スタンプ」の音楽を流すとしてつくりくと思う。

アームジョー、あーむじょー、ああむじょう、嗚呼無常……、いや、忘れてくれ。

アームジョーはデバイスです。

イメージは「ジオングのインコムが紐がないバージョン」です。

……これって何武器にカテゴライズされるんだろう？

13 ある意味、真の理解者（前書き）

なんか当初の予定とどんどんずれていくような気がする……。

13 ある意味、真の理解者

side 暴力行為を止めなかった中将

織部まもるが騎士カリムを殴り飛ばした。

レジアスに彼の行動を止めるなかった。気持ちを理解できるなどと傲慢を口にするほど無知ではないし、同情できないほど心の冷めた人間でもないからだ。そして、シスター・シャツハとの衝突も傍観に徹した。

レジアスは数年前に、自分の親友であり、同志であり、部下だった一人の男を失っていた。まもるの様に直接的な痛みを伴う別れではなかったが、それでも心には深い傷を負った。それゆえの行動であつた。

同時に打算的な思惑もあつた。

戦闘力の確認である。

（初見とはいえ教会の上級騎士を相手に圧倒か……。準ストライカー級といったところだろう。それに先ほどの僅かな違和感。あれが昨晚の言っていた希少技能^{レアスキル}か？ 一度、直接確認する必要があるな）

結果は良好。

戦闘スタイルや希少技能^{レアスキル}の性能次第で変わってくるが、あれならどこの部隊に投入しても活躍できるだろう。なにより、レジアスは彼を一局員として終わらす気は毛頭なかった。

そして、クイズ形式の事実の暴露が始まる。

レジアスは本人から直接聞いていたので、いまさら聞く必要はないと聞き流していたのだが、周りの反応を見ながら話すまもるを見て考えを改めた。

（周りの反応を見て悦に浸っているのか？ それとも内容を吟味しているのか？ ——！！ そうか！ 相手に責任を引被せて、自分に累が及ばないように誘導してるのか！ …… そんな必要のないのに苦労性な若者だな……）

ここで確認しなければならぬ事柄がある。当事者三人の立場、まもるとシスター・シャツハの行動の計三点だ。

時空管理局の局員になるにはいくつかの手続きが必要となる。訓練校、士官学校のいずれかの卒業証明書か嘱託魔導士としての実績記録、それに加え希望部署の届出と自身の履歴書、この三つを人事部に提出し、辞令を受けて初めて時空管理局局員を名乗れるのだ。

当然、卒業してすぐ行方不明になっていたまもるはこれらの手続きはしていない。よって管理局員ではない。それどころか、訓練校も卒業しているので完全な一般人という扱いになる。

一応制服は身に着けてはいるが、それは混乱を避ける為の予防措置であり、あくまでも地上本部でのまもるの立場は部外者なのだ。

次に他の二人の立場なのだが、こちらは至って明確だ。

騎士カリムは聖王教会騎士団に所属し、同時に時空管理局にて理事官としての籍も置いている。少将という階級は持っているものの、実際には教会と管理局を繋ぐ窓口にして出向中の騎士たちのまとめ役ではない。それゆえにそれほど権勢は大きくない。むしろ煙たがられている。

シスター・シャツハは騎士カリムと違い聖王教会騎士団にしか所属していない。生粋の騎士であり、若い騎士たちの武を鍛え、聖王教会の教えを説くいわば教師だ。付き人としての仕事もあるが、ほとんどの一般騎士は彼女を騎士団の重鎮と認識している。義に篤く、忠を尽くすその姿は騎士の鑑とまで言われているようだ。そして、当然のごとく強い。

ここでまもととシスター・シャツハの行動を振り返ってみよう。簡単に纏めると、『まもるがカリムを殴る』『シャツハがまもるに襲い掛かる』『まもるがシャツハを返り討ちにする』となる。

『まもるがカリムを殴る』、これは明らかにまもるが悪い。どんなに言い繕うとも犯罪行為であり、傷害罪で現行犯逮捕されても文句は言えない。

『シャツハがまもるに襲い掛かる』、これはシャツハが悪い。カリムを守るためのだろうが、まもるが義手とはいえ素手で殴ったのに対してシャツハはデバイスで斬りかかった。その上まもるはまだ一般人扱いだ。魔法を使って一般人に攻撃するのは管理局法のなかでも重罪に分類される。この時素手で殴りかかっていたら半分半分の責任で済んだだろう。

『まもるがシャツハを返り討ちにする』、最終的にこの事実に帰結する。もし結果が違っていたら、まもるは怪我を負い、尚且つ障害罪で訴えられていただろう。しかし現実にはまもるの勝利に終わっている。これが罪に問われない理由なのだ。

今まで長々と説明してきたことを纏めると、

『騎士カリムが襲われ、それに逆上した付き人兼騎士団の重鎮、シスター・シャツハが逆襲に及ぶも、一般人である織部まもるに打倒される』

という構図が出来上がる。

ここで重要なのは逆上して襲い掛かったが”一般人”に返り討ちにあったという事実だ。

格式と伝統を重んじ、一対一では無敵と公言する騎士団、それも上位者が一般人に負けるなど恥以外の何物でもない。当然、聖王教会側はこの事件をなかったことにしようとするだろう。現場である地上本部もそうだ。カリムは時空管理局にも所属している為、見方によっては不祥事に捉えられかねない。

そして双方の合意の下、結果である『シャツハの敗北』がもみ消されれば、原因である『カリムが殴られた』という事実も、矛盾をなくすため闇に葬らなければなくなるのだ。

問いただす事件がなくなるのだ。

必然的に咎を負う人間は皆無となる。

「えくすとらくえすちょん！」

（ん？ 今度はなんだ？ 教会に関して含むものは全て出し切ったと思ったが……）

「聖王教会は誰が創設したのでしょうか？」

レジアスは首をかしげる。

聖王と付いているのだ。当時の聖王が中心になって成立したのは間違いない。史実もそれを裏付けているし、なによりそれを直接伝えてきている名家が多々ある。騎士カリムの家、グラシア家もそのうちの一つだ。

「せ、聖王陛下です！ これは間違いありません！！」

今まで散々否定されてきたのだ。脈々と受け継がれてきた歴史と伝統まで否定されてはたまったものではない。

だが、まもるは高らかに声を上げた。

「ハイ残念。聖王家が宗教に手を出したという事実は一切ありません！ それこそベルカの勃興から滅亡までね。と、いうわけで――」

一旦言葉を切る。

その瞬間、お茶らけた雰囲気霧散し、先ほどの緊張感以上の濃密な“ナニカ”の気配が辺りに満ちる。それはまもるがパラディンの封印を解いたときに似ていた。

「聖王家の守護を担う盾の一族が三十二代目党首、織部まもるが問う。――貴様らは一体何者だ？」

否定した。

それも完全否定だ。

カリムを見れば茫然自失で口がだらしなく開いている。どうやら反論する気概もすでに砕かれてしまったようだ。

まもることだから証拠がすでにあるのだろう。それも、それが世間の目に触れれば聖王教会が一瞬にして瓦解してしまうような強力なものが……。

そしてそれはレジアスの望むところではなかった。

「答える。返答如何によつてはこの場で貴様らを――」

「待て！ 織部まもる！ それ以上続けるなら騒乱罪でしょっ引くぞ――！」

まもるの言葉を遮ってレジアスが待ったをかける。

そう、『今はまだ』聖王教会に倒れてもらつては都合が悪いのだ。それに今の彼は軽いトランス状態にあるように見える。自制が効かずこのまま彼女達を殺してしまつては、さすがにブタ箱行きは免れない。

「……」

「……」

沈黙が場を支配する。

まもるはレジアスに背を向け、レジアスはその背中に貫くような視線を向けている。

「……パラディン」

どうやらまもるは踏みとどまれたようだ。
パラディンを解き、向き直って深々と頭を下げて謝罪した。

「申し訳ありません中将。少々暴走しました」

まだ多少引きずっているようだが問題なしと判断したレジアスは、
厳しめの言葉で注意する。

「貴様は若さに引きずられすぎた！ 自分を律することが出来ね
ばこの先やっていけないぞ！」

「……はい」

「よろしい」

まもるの返事を聞いたレジアスはカリム達に向き直り退去を促した。

「騎士カリム、今日のところは帰りなさい。後日、いろいろ話し

合おう」

「……わ、わかり、まし、た……」

目じりに涙を溜め、口から出る言葉は嗚咽交じり。先ほどの迫力から開放されて気が緩み泣いてしまったのだろう。

実際の戦場に出たことはないのだろうな。そんなどうでもいい事を思いながら、周りにいた局員達に指示を飛ばす。

「諸君！ この場での出来事については緘口令を敷く！ いいか？ 可能な限り外部に洩らすな！！」

「ハッ！！」「」「」「」

レジアスが踵を返し、オーリスとまもるを引きつれその場を跡にすると、局員達はいつもの朝の仕事に取り掛かった。

喧騒の中でカリムは、シャツハを抱いたまま暫く動けなかった。

「中将、本当に助かりました」

まもるが再度感謝の言葉を述べる。

「それはさっき受け取った。それよりも証拠はあるのか？」

「は？」

「聖王教会の成立に聖王家がかかわっていない証拠だ」

「ああ、確かにありますよ。証拠というより証人ですかね？ 出しましょうか？」

そういつて左の二の腕に右手を這わせ、なにかを開き中のものを掴む。

右手に握っていたのは次元刀だった。

「それが証拠か？」

「そうです。聖王家の歴史を正しく、そして余すことなく現在に伝えることが出来るものです」

「そうか……。……その札を切るのは暫く後だ。今は大事にしまっておけ」

「はい」

レジアスのこの言葉は『いつか聖王教会を潰す』といっているようなものだ。

その証拠に、二人は視線が会った瞬間にニヤリと意地の悪そうな笑顔を浮かべた。

それを見たオーリスは、自分が苦勞する未来しか見えなかった。

13 ある意味、真の理解者（後書き）

大幅捏造第二弾！

聖王教会の成立の巻！

Wikiには「聖王が神託を受け、その教えを広めた事が聖王教の発端である」と記載されています。今回はこれを捻じ曲げ「そんな事実ねえーよ」ということにしました。作中でも述べていますが、これは聖王教会の崩壊フラグです。何時崩壊するかは自分にも見当が付きません（爆

次回からは一気に時間の進みが加速することが予測されます。でもポンポンと飛ばすようなことはしません。

まあ、本編開始まであと四つぐらいって所でしょうかね？

それでは今回はこの辺で！ チャオズ！

14 早すぎる退場（前書き）

いつの間にか総合PVが28万超えてました。ユニークもニア5万です。

普通ならここで卑屈になると思いますが、それはあまりにも失礼だと思うので、ただただ感謝をしたいと思います。

感想を寄せてくれた人に

『ありがとうございます』

お気に入り登録してくれた人に

『ありがとうございます』

そして、読んでくれた全ての人に

『ありがとうございます』

14 早すぎる退場

俺が聖王教会のバカチン達をフルボッコにしてから、早いもので半年ほど経過した。

あの後には結局捕まらず、注意を受けるだけで何にも罰は受けなかった。それどころか、一部の高官からは「よくやった！ 感動した！！」とお褒めの言葉を頂いた。嫌われてるね聖王教会。

あ！ あと三等陸尉で入局して今現在二等陸尉です。昇格が早すぎると思っけど「資格もってるから始めから高いし、ある程度早い」との言葉を人事部の人にもらった。もしかしたら聖王教会騎士団の使者が持ってきた『騎士任命状』の件も絡んでるかもしれない。まあ、使者の目の前で破いてゴミ箱に突っ込んでやったがな！ それにしてもあの顔は傑作だった。アッハッハ。

それはさておき、この半年ほどでいろいろな部署を回った。地上本部の各部隊は勿論のこと、技術開発部や古代遺失物管理部などの専門知識が必要なところから、司令部などの上級仕官がてんこ盛りのところまで、とにかくたくさんの経験をつませてもらった。

一番変なところだと、訓練校へ臨時講師として赴いたことだろう。小隊指揮資格持ってるからそれを講義しろとのことだったが、卒業して一年も経っていない、しかも実戦経験のない俺にやらせるとかどう考えてもおかしい。さらにいうなら、講義後の実技で三個小隊、つまり一個中隊なんだけど、それを率いて模擬線をするとか輪をかけておかしい。俺が教えたのは小隊資格だ。

まあ、一番謎なのは、俺のプロフィールに「中隊指揮資格」が加わったことなんだけどね。

それで、現在の所属が経理課。これがたらい回しの終着点のよう
だ。

断定はできない。が、ここ以外はいったことがある。それだけだ。

「さて、どうしようか？」

あてがわれた机で自分の役割を考える。

今までは、中将の「無駄をなくせ」という命令の元行動してきた。
訓練や任務の際の無駄な行動をそぎ落とし、情報のデータベース化
を進めて手順の簡略化を図った。つまり、時間的な無駄をなくすよ
う努力してきたわけだ。

じゃあ経理課ではどうだろう？

見た限り、システム面では円滑に活動している。むしろ少ない資
金をやりくりする為洗練されている。人材不足な感が否めないが、
これは許容範囲だろう。そうになると、今までの時間的な無駄の淘汰
は通用しない。しかし、この課に俺が配属されたのは何か理由があ
るはずだ。よく考えよう。

「――金か？」

そうだ。経理課は主に金を管理するところだ。資金がカツカツの
「陸」にとって、無駄遣いはご法度だろう。

「よし！ 無駄な出費を減らそう」

方針は決まった。

とりあえず、それほど必要がないのに維持費がベラボーに高いと
ころでも探そう。そうそうないと思うが、実動部隊ではよくわから

ん儀式とかがあったぐらいだ。もしかしたあるかもしれない。ホントにね、満月の晩に全裸で行水とか訳分からん。

「じゃあまずは金額のデカイところからピックアップして……」

端末から情報を引き出しディスプレイへ投影する。

そして愕然とした。

「んなっ！？ 何でこんなに……」

機密、機密、機密。画面の半分以上が機密費で埋まっていた。

「あ、怪しい……。怪しすぎる……」

詳細が提示されていないのは勿論のこと、それに投入されている金額がどれもアホみたいに高額だ。上海の。王がこの場にいたら、「クンクン。この匂いは——、不正の匂い——」とか叫ぶことだろう。

とりあえず、このままでは埒が明かないので、

「ちゅうちゅうたこかいな、っと」

アームジョーの無駄に高い演算能力を駆使してハッキングし、プロテクトを解除するところから始めた。

え？ 犯罪じゃないかって？

大丈夫、大丈夫。痕跡なんて残さないから無問題さ！

さて、お仕事頑張りますか！

むむっ！　なんだこの莫大な維持費は……。機密費を隠れ蓑にした裏金か？　それとも誰かの横領か？　いずれにしろ、明記されない時点でアウト！　無駄なお金はカットカットカットオオオ！

先に金の流れを止めて、自発的に改善を促そう。それでも治らなかったら電気や水道などのライフラインを止めて、まだダメだったら直接乗り込んで警告しよう。うん、それがいい。

しっかしほんとになんだよ、この「メンテナンス代」って。ちゃんとメンテナンスした物と使った道具を明記しやがれ！

経理舐めんな！　バーローー！！

side どちらのアジト

うつそつと茂った森の地下、やわらかい土の下にある硬い岩盤をくりぬいたそこに、とある次元犯罪者のアジトが存在した。入り口も、人の立ち寄らない山裾の洞窟の奥に偽装されており、まさに「秘密のアジト」と言える様相を呈している。

その中の一室にて一組の男女が話し合いをしていた。

「やっぱり彼を送りつけて正解だったね。とても面白いことになっているよ!」

一枚の報告書をめくりながらそう言う男性。

年のころは少なく見て二十台、多めに見ても四十台には届かないだろう。白衣を纏い足を組んで斜め読みする姿は、どこかの研究所に勤める科学者のようだ。

「ですがドクター。少々やりすぎではないでしょうか？　このままでは計画に支障をきたす恐れがあるように思えます」

男性をドクターと呼んだ女性は、そう苦言を漏らす。

すらりと伸びた手足を持ち、出るところは出て、引つ込むところは引つ込んでいる、この世の女性が理想とするプロポーションを体現したような女性だ。当然のごとく顔立ちも整っている。

「まあ、そういわないでよウーノ。彼のおかげってのもなんだけど、研究の方はほぼ完成しちゃってね。ぶっちゃけ暇なんだよ」

そう言ったドクターの顔はどこか寂しげだった。子供が大好きなおもちやを失くしてしまったような、自分の大切な人が死んでしまったような、そんな喪失感を前面に押し出した表情だった。

ウーノと呼ばれた女性はそれを悲しげな瞳で見つめている。彼女の生きがいは、研究をするドクターの生き生きとした姿を見ることがあったのだろう。その姿は今後見られないと断言されてしまった。他ならぬ本人の言葉によって。

「ならば生命操作や生体改造に拘らず、他の分野にも手を広げてみてはどうでしょう？」

ドクターの研究活動は多忙を極めていた。それゆえにウーノという補助役は存在することが出来ていたのだ。しかし、その研究活動は終わろうとしている。それは彼女の存在意義を否定するに足る事実だった。

なんとかして研究活動をさせようと、ウーノは内心は必死に、外見は諭すように言葉を続けた。

「そうですね、例えば彼に取り付けた『特殊義肢型デバイス』の研究などいかがでしょう？ これまでの研究内容も生かせるのではないかと思いますか……」

ピーッ ピーッ ピーッ

ウーノの言葉は、部屋に鳴る着信の音に遮られた。

「ん？ ドウエから？ ついこの間定期連絡があったばかりだ

けど、どうしたんだろう？」

秘匿回線を開いたドクターは疑問を浮かべる。

ウーノの妹にあたるドウエは潜入工作を得意としている。今はその身を時空管理局に置き、様々な情報をドクターに流していた。そしてその性質上、危険を避ける為に外部との連絡は極力避けている。そんな彼女がその危険を冒してまで連絡をしてきたのだ。疑問に思わない方がおかしい。通常なら目を通すのに三時間ほど掛かる量の報告をしてくるのに、今回に限っては情報量がもの凄く少ないのもそれに拍車をかけていた。

「――ッ！！」

普段、ニヤケ顔をしているドクターの顔が驚愕に歪む。それを見たウーノは何の報告なのか問いただそうとしたが、次の瞬間、喜色に満ちた笑顔を作り出すから聞くことが出来なかった。

「ヒヤハ！ ヒヤハハハ！ ヒヤハハハハハハ！！ 本当に、本当に彼は面白い奴だ！ ああ、愉快だ。こんなに愉快なのはウーノ、君たちが生まれたとき以来だよ！！」

ドクターは笑った。笑って笑って、笑いすぎて目じりに涙が滲んでいる。叫びながら室内を歩き回り、両手を振り回して喜びを表現する姿は狂人のそのものである。

しかしウーノは知っている。それが純粹に喜んでいる時の行動だということ。

なぜなら自分が、自分達が生まれたときに同じ行動を取っていたのを見ているからだ。

それだけウーノは分からない。

なぜドクターがこれほどまでに喜んでいるかが。

ふと視線をモニターに向けると、先ほどの報告がまだ表示さえていた。

それを読んだウーノは、悔いるべきなのか素直に喜ぶべきなのか真っ先に悩んだ。

——ドゥーエから親愛なるドクターへ——

次元航行部隊の調査中に緊急事態発生

一週間前に最高評議会の維持装置が一斉停止
その後活動停止、焼却処分済み

実行犯：織部まもる二等陸尉

名 目：資金節約のための余剰設備の廃棄

至急、次の指示を請う

14 早すぎる退場（後書き）

扱いにくいのでさくつと退場。

数の子フラグを立てたいがため、という側面もある。

今後は「アニメ原作に沿いつつ独自展開」という自分でも良く分からない展開になると思います。正直に言うとノープランです。

今回の捏造設定

『最高評議会の立ち位置』

この小説での彼らの立場は「陸上本部寄りの管理局のTOP」ということになっています。必然的に「海」と「空」への影響力は伝説の三提督の方が上回り、それを調査、阻害するためにドウーエさんは出張したわけです。そして、その隙にまもる青年がやっちゃったわけです。

この後の混乱は次話に回します。しかし、混乱といっても都合主義満載で一気に収束するでしょう。というか、まもる青年が話をこねくり回して収めます。

それでは次回をお楽しみに

15 弁当とお茶（前書き）

捻り出すのに時間がかかったわりにインパクトが弱い。

15 弁当とお茶

最高評議会が突如いなくなった。

この大事件に時空管理局陸上本部は大きく揺れた。

なかった。

なんて事実は一切

下級職員は最高評議会の存在なんて知らなかったし、中級職員は触れる機会が皆無だった。上級職員はさすがに慌てたが、すぐに「老害がいなくなった」だけだということに気が付き落ち着きを取り戻した。

また、最高評議会絡みで不正を行っていた者はボロを出して捕縛され、資金援助を受けていた違法研究所は干上がって自滅した。

陸上本部に限れば、闇に消えた金表に出て正しく運用され始めた為、ある程度資金不足は緩和されている。

つまり、最高評議会がいなくなろうとも平和だったのである。

side 無自覚にも書類一枚で改革を成した男

昼休みにレジアス中將に呼び出された。

経理課での仕事が楽しくて、バツサリ予算カットしたのがまずかったのだろうか？ それとも、浮いた予算を装備不足の部隊へ勝手に回したことがばれたのか？ そんなこんなで恐々としながら中將の部屋の前に立つ。

「織部まもる二等陸尉入ります」

ドアをノックして入室。

相変わらず中將の顔は悪人面で、オーリス一尉は美人だった。そんなことはさておき、

「何か御用でしょうか？」

怒られるんだろうな〜と思いつつも、昼休みが潰れるのはイヤなので早速本題に入る。昼飯抜きで午後の仕事をやるのはつらいのだ。

「まあ、そう急くな。昼休憩中はプライベートだから昼飯でも食べながら話そう。オーリス、織部二尉に食事を持ってきてくれ」

「はい、わかりました」

え？ ただ飯ですか？ ラッキー。

プライベートということなのでその辺のソファに勝手に座って待つ。書類仕事に一区切り付いたのか、端をそろえたそれを机の脇に置くと中將が向かい側に座った。

「お待たせしました」

そういつてオーリス一尉が持ってきたのは三つの包み。

中將とその副官の昼食だからちよつと豪華なものを期待したのだが弁当のようだ。だが残念という気持ちは薄い。状況的に彼女の手作り弁当の可能性が高いからだ。

女性の手作り弁当。嗚呼、なんと甘美な響きなのだろう。

包みを解き、蓋を開けるとミッドでは珍しい銀シャリおしめが輝いている。おかずは生姜焼きだろうか。食欲を誘う匂いが俺の鼻腔をくすぐる。

手を合わせていただきますと言ってから箸を手取る。肉を一枚拾い上げ、それで銀シャリおしめを包むようにしてはさみ、口に入れる。

うん、美味しい！

添えてあるほうれん草の胡麻和えもいける。醤油で味が調えられており、濃過ぎず薄過ぎず、それでいて胡麻の風味が生きている。茶色、緑色ときて、今度は黄色の玉子焼きに手をつける。恐らく出汁巻きだとは思うのだが、それがなんなのかは一口では分からない。少なくともシイタケや昆布出汁では無さそうだ。となると魚系のだろうか？ そう思いつつも一口。——そうだ、ニボシだ！生臭くなってもおかしくないのそれが気にならないほどの調和を保っている。うん、これも絶品だ。

あつという間に食べ終わってしまった。名残惜しいが蓋を閉じる。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです。また、機会があればご相伴に預かりたいですね」

二人に向かって頭を下げる。

恐らく褒められ慣れていないオーリス一尉は照れているだろう。
レアな顔を見るべく顔を上げる。

（なん……、だと……！？）

俺の目に映ったのは、ニヤケ顔で頬を掻くレジアス中将だった。

「いや、なんだ……。そこまで褒められるとさすがに照れるな」

クソッ！　なんということだ！

俺ともあろうものがオッサンの手作り弁当を絶賛してしまうなんて！

チクシヨウ！　チク……シヨウツ！！

閑話休題

「で、お話とはなんでしょう。まさか弁当の感想が聞きたいから呼んだ、というわけではないのでしょうか？」

いい年したおっさんが「弁当美味かったか？」なんて聞いてきたら軽く死ねる。

「慌てるな。あと一人客人がいる」

中將が客人と称する人物が……。思いつく限りでは「海」と「空」に幅を利かせてる伝説の三提督と、ミッドチルダ政府の大統領、あとは財界の大物と言ったところだろうか。いづれにしても俺との接点は皆無だろう。

どんな人物に会うのか、それを考え込んでいると、

「安心しろ。お前はすでに会ったことがあるはずだ」

なんですと？

自慢じゃないが俺のミッドでの交友関係は狭い。

いい関係を築けているのは目の前にいるゲイズ親子と訓練校時代の同期達。それに少数の実動部隊の隊士や研究員、事務員などだ。そしてそのいづれもが忙しく仕事をしている。よってここには来れない。

毛嫌いしている面子は主に地球からの知り合い、もしくはその関係者だ。三バカ娘に始まり砂糖が大好きな若作りと影の薄いその息子。ユーノ・スクライアとか言う人も一応知ってはいるが、なのなのうるさい子が話題に出すだけで面識はない。

聖王教会の関係者はありえないだろう。お互い殺^やりあつた仲だ。出会ったらず間違いなく俺の左腕が唸る。

はて？ 本当に誰だろう？

唐突に窓のブラインドが閉じた。そして本棚の後ろからうつすらと光が漏れ出してくる。あれは……、——魔力光？

本棚が手前に移動してから横にスライドする。奥にはすこしスペースがあつて小型のトランスポーターが設置されていた。そして、そこから現れたのは一組の男女だった。

「やあ、待たせてすまないね。そして久しぶりだね。織部まもる君」

よれよれの白衣を身に付けたニヤケ顔の男。

——確かに。俺はこの人物を知っている。

「改めて自己紹介をしよう。管理局で言うところの次元犯罪者のジェイル・スカリエツィだ。よろしく」

俺の命を繋げ、新しい左腕をくれた人がそこにいた。

side 中将執務室、三者会談

レジアスとジェイルはまもるに対して現状を説明した。

まもるの仕事で最高評議会が消滅したこと、レジアスとジェイルの関係、ミッドチルダの表と裏の動き等、進んで関わりたくないことを懇切丁寧に解説した。そして最後にレジアスはまもるに恐怖の言葉を投げかけた。

「良くも悪くもお前は今回の発端なのだ。協力してやるから覚悟を決めろ！」

まもるの意思は半ば無視されているがキツカケを作ったのは間違いない。その責任を放棄するつもりはないし誰かに擦り付けることも良しとしない彼は、ブツブツ文句を言いながらも承諾するのだった。

「レジアス、危険を冒してまで僕を呼んだ理由は？ なにも織部まもる君に現状を説明するためだけではあるまい？」

ジェイルの疑問にレジアスは言葉を詰まらせる。
暫く間を置き、世間話でもするかのように話し始めた。

「スカリエッティ。お前はこれからどうするのだ？」

「……そうだね、今製作中の研究成果が完成したら無人世界にでも引っ込むよ。なんせ、最高評議会はそこの若者が打ち倒してくれたしね。いや、これで後顧の憂いなく旅立てるってものだよ。あつはつは」

まもるを見て笑うスカリエッティ。その笑顔は実に清々しく、かつてあった翳りは一切なかった。

「……研究はどうするのだ？」

「ああ、アレかい？ もう終わったよ。次元刀君との取引のこと

はレジアスも聞いているだろう？ 織部まもる君を助ける代償に情報をもらったんだがね、これが凄いい代物だね。なんと人工生命のものだったんだ」

「なっ！？」

驚いて腰を浮かすレジアス。そのまま疑うようにまもる見るが、クビを千切れんばかりに振って全力否定するまもる。

「付け加えるとね、次元刀君は自分のことを『ただの端末』って言ってたよ。推察するに、どこかにデータベースがあるんだろう。そこから情報を引っ張ってきて取引に提供した……。そんなところだろうね。だから織部まもる君に罪はないよ」

ジェイルはそういつて両者を落ち着かせる。

彼の話はまだ終わっていない。重要なのは『情報の価値』なのだ。レジアスが冷静になったのを確認してジェイルは続きを話し始めた。

「で、重要なのはここからなんだけど。始めは情報を頂いたら適当に治してそこら辺にほっぽり出すつもりだったんだ。けれど貰った情報を調べたらとんでもないことが分かってね」

ここで一旦区切り、オーリスとウーノが淹れたお茶で口を湿らす。それに習い他の全員もお茶を口に含む。

「ふう……。おいしいねこのお茶」

「……ブフウッ！」「」

この一言に、ジェイルとウーノ以外が吹いた。

「汚いな君たち」

「うるさい！ そんなことはどうでもいいからさっさと話を話
さんかつー！」

「わ、わかったよ。わかったからその強面を僕に近づけないでく
れ」

乗り出したレジアスを手で押し返すような仕草をして遠ざけると、
ジェイルはポツリと一言だけ、搾り出すように言った。

「……報告書だ」

「報告書？」

「ああ。それも僕が最高評議会に提出してきた中間と最初に付く
ものではない、すでに完了した研究の成果が記録された、――
――最終報告書だ」

「「なっ！？」」

「驚くのはまだ早いよ。ここまではどんなに未熟でも成果として
みなせば最終報告書なんていくらでも書ける。問題はその作成者だ」

ゴクリ

誰かの生唾を飲む音が響く。

ジェイルが最終報告書と断言したものだ。中身はそうとう高度な

ものだろうと容易に推測できる。それゆえに誰が研究を完成させたのかが重要になるのだ。

辛抱たまらずレジアスが先を促す。

「なんという名前なのだ？」

「イニシャルは」・S。——多分僕のオリジナルだ」

あまりの事実全員が言葉を失った。

沈黙が支配する中、全員静かにお茶を飲んでいた。
しかしそれはジェイルの一言によってすぐに破られる。

「さすが僕、完璧な理論だったよ！」

「ブフウツ」「」

今度はウーノも盛大に吹いた。

15 弁当とお茶（後書き）

ス力さんが天然ボケ風味になってきた。
どないしよう？

まあ、いいか。

16 暴走する思考（前書き）

本来ならすでにS t Sの時間軸に突入しているはずなのだが……。俺の構成力と文才不足ですね。知っていました。

ぎゃふん

16 暴走する思考

ドクターの天然ボケ発言で、場の雰囲気が一気にしらけた。ついでに言うなら、四人が噴出したお茶によって物理的に場が湿気った。

「か、簡単にいうと、お前は今後暇になるのかな？」

レジアス中将は頑張ってシリアスに戻そうとしているけど、どうにも無理っぽい。まあ、俺には概ね関係なさそうだし、聞き流しておこう。

「そうだね。暇といえば暇だね。というか、暇じゃなければこんなところまで来ないよ。ほら、僕って一応次元犯罪者だし」

暇だから警察機関の中枢に来るってのもどうだと思うが……。研究者とかの思考回路は分らんなあ。

コホンと一つ咳払いして、中将がのほほんとお茶をすする犯罪者に交渉を持ちかける。

「……司法取引せんか？」

この言葉に真っ先に反応を示したのは、ドクターの隣に座るウーノという美人だった。膝に置いてあった手をゆっくりと腰元に持ってくる。トランスポーターで来たからボディチェックは当然なので、武器の持ち込みは可能だ。恐らく腰回り、もしくは内腿あたりに暗器でも持っているのだろう。さすがに『中将暗殺！ 地上本部の警備はザルだ！』なんてことになったら面白くないのでこちらで予防策を取ることにする。

「——詳しく聞こうか」

^{ゴスベル}絶対聖域を完全な状態で使うには、パラデインを顕現させて盾の下に打ち付ける必要がある。しかし、不完全な状態での発動ならば別だ。今回のように機先を制すればいいだけの場合は、抑圧効果や増幅効果は必要ない。なにより派手に行動したら敵対行動と取られ、俺が攻撃されかねない。

「話は簡単だ。——表で仕事をしてみないか？」

意識して自分が持つ硬いものを下に打ち付け、その時に発生した音をトリガーとして発動する絶対聖域^{ゴスベル}。盾で行使するのがもつとも効果と効率が高いのだが、別にそれだけが方法じゃない。例えば、

——俺の左腕の義手とかな。

「大々的に戦闘機人でもつくれと？」

弁当箱の上にある箸を、お茶を右手で取りながら落す。それを左手でお手玉しながら遊び、床に落ちるギリギリのところから勢いよく掴む。箸を握りこんだ鉄の硬い左手は、勢い余って床に打ち下ろされる。

——ゴチン

よし、成功だ。

「さすがにそれはマズイ。協力して欲しいのは違法研究者の情報提供と医療関係だ」

自分の感覚が広がるような感触。きちんと発動したようだ。
さっそくウーノさんを調べる。

「自由はないけど保障はされる……。といったところかい？」

予想通りあった。内腿にナイフと拳銃が一つずつ。あと腰の後ろあたりに閃光弾と予備弾倉。それに対してドクターに武装はなし。全幅の信頼をウーノさんに寄せているのか、それともまる投げしているだけなのか判断が付かない所だが、敵地において丸腰とか、随分度胸がある人間だ。

「別に研究するなどは言っておらん。ただ内容に違法性があつたらこちらで禁止するだけだ。――ああ、有益性が認められたら、それ相応の支援もするつもりだ」

ついでだからこの部屋もざっと調べておこう。

一番違和感があるのはトランスポーターだけど、ただの移動手段だから無視。人、物、床下、壁、天井と順繰りにいきますかね。

「……ちよつと考えさせてくれ。なに、そう時間は取らせんよ」

一人だけ暗器持つてるけど話し合いのメンバーだから問題なし。

物は……。あつた。鉢植えのなかに盗撮器。電源に接続されていない、尚且つ小型から考えるに、遠隔操作でオンオフが出来るのだろう。実際に現在どこかに送信している気配はない。

床下は問題なし。というか、防備上分厚いのであまり細工はできない。

壁は……。こっちにもあつた。これは盗聴器かな？ 壁に掛けられた絵のなかの人物の目に偽装されている。もう調査済みなのだろう。よく分からないが細工されている。

「ああ、そうそう。お前が隠居してこちらに一切関わらないと誓ってくれるなら追いかけんよ。これは司法取引に応じようが応じまいが変わらん」

天井は……、—— あ！ いかん！

「そうだね、それじゃあ——」

「ちょ、ちよつと待った！」

マズイ！ マズイぞ！！

管理局員の高官と次元犯罪者が取引したのがばれたらえらいことになる。最悪解体なんてことも……。それだけは絶対に阻止しなければ！ 俺の明日の食事のために！！

ばれるといけなので筆談にて二人に状況を知らせる。

天井の通気口に人影あり

簡潔にして十分。

その証拠に、二人は微動だにせず当たり障りの無い話しに切り替えながら、紙とペンを取り出した。

レジアス中将の方が先に返答をしてきた。というより、ドクターはなにもしていない。メモを出しただけで静観している。

人数は？

1

あちらの武装は？

ざっと調べる。

目や手触りでなく、感覚で調べるからすぐに分かった。

ナイフ1、拳銃1、爆発物1

爆発物は丸っこくてレバーみたいなものが付いているから、多分手榴弾だろう。

とりあえず、投擲武器があることが分かるだけでいい。

こちら側は？

さつき探ったので即答できる。

緊急時なので申し訳ないが敬称略。

レジアス、オーリス、ドクターの三人は皆無。自分は左腕。ウーノはナイフ1、拳銃1、フラッシュバン1

パラディンは即時展開がまだ出来ないので戦力外。次元刀は左腕に収納してあるし、もともと儀礼色が強いものなので牽制が精々。さらに武器を渡したとしてもこの三人は荒事には向いていないだろう。最悪の場合、俺を囚にして逃げてもらうしかない。

ウーノさんが武装を当てられてギョツとしているが、緊急事態なので気にしない。

ん？ そっぴや不審人物と彼女の武装って似通っているな……。

どうすればいい？

やっと筆談に参加したかドクター。でもすることないんだよね。相手が動いてくれなきゃさ。

牽制する。筆談にて交渉を。有事の際は逃走を

策を練る時間なんてないし、相手に増援を呼ばれるのも厄介だ。交渉が成立するにしろ決裂するにしろ、早いところ退去した方がいい。

いまのところ思いつく策は一つ。たぶん不自然すぎて怪しまれると思うが、なにもしないよりはマシだろう。

とりあえず一芝居うつて、先ほどの発言に正当性を持たせる。でも、すごい怪しいよなあ。

「す、すいません。いきなり大声出してしまつて……」

「いや、それはいいのだがどうした？」

レジアス中將が三文芝居にのってきてくれた。
正直助かります。

モジモジする振りをして、机の下に仕舞ってある箱を取り出す。
俺の記憶が確かならば、これは葉巻と灰皿のはずだ。

「あの、自分はなんだか蚊帳の外なんでちょっと吸ってもいいですか？」

中將の執務室に常備されている葉巻を手取る。持ち主である上司が仕事しているのに、言外に「休んでもいいですか？」と聞いている俺はひどく不自然だろう。

しかし、意図を読み取った中將は不敵に笑って答えてくれた。

「……仕方がない。ただ、今は客と話している。だからあちらの”換気扇”の下で吸え。それならば煙もこちらに来ないだろう」

ベストアンサーです。中將。

動いたら声をかけます と書き残して、俺は立ち上がった。

ゴスベル
絶対聖域発動中の俺の動きは鈍い。それを誤魔化す為に、葉巻に

火をつけながら進む。作業しながらの移動なのでさほど不自然ではないはずだ。

換気扇の真下から右に少々ずれた所に陣取り、咥え葉巻で換気扇のスイッチを最大にして入れる。最大で回すにはもちろん理由がある。回転音で不審者の耳を潰すことと、カメラなどの異物の侵入を防ぐ為だ。行動を誘発する為に紫煙を送ってイヤガラセをするという側面もある。

当然リスクもある。俺の行動が不審者には丸見えだということと、他の四人とのやり取りが出来ないことだ。それは、常に後手に回るということを意味している。

どう転んでも俺が危ない。ちよつと鬱だ。

それはさておき、上の人物、もしくはその後ろに控えている人物の目的はなんだろう？

一番初めに懸念した中將の暗殺だろうか？ いや、それはないな。それが目的ならば俺が気が付く前に爆発物を放り込めば事は済む。ならば弱みを握ることか？ もしそうならばすでに去っているはずだ。『中將と次元犯罪者の取引』。これは十二分にスキャンダルなのだから。まだ上に居るのでこの線もなし。

中將の護衛というのはどうだろう？ ……ないな。将官が護衛をつけるのはありふれた話だけど、護衛対象がその存在を知らないというのは考えにくい。付け加えるなら、通気口という入りにくく出にくいところに潜伏する意味が分からない。

分からない。上に居る奴が何を考えているのかサッパリ分からない！

（もうやめよう。どう考えてもこちらが、いや、俺が不利だ）

ヘタな考え休むに似たり。実際、葉巻ふかしてるのは休んでいるようなもんだしな！

それにしても、葉巻ってのは結構良いものだな。なんとなく思考が進むといふかなんというか……。落ち着く、という表現が一番しっくりくる。うん、気に入った。今度は煙草にも手を出してみよう。まだ未成年だけど就業年齢が低いのですでに俺は成人扱い。エロ本も普通に買えるし、酒なんかもおおっぱらに飲める。こういうところは異世界バンザイ、だな。

ああ、葉巻がうめえ。

四本目を楽しんでいたら、中将たちが握手をした。どうやら合意に達したらしい。

「織部。こちらは終わった。これから今後の話をするから戻って来い」

「分かりました」

換気扇を消そうと手を伸ばして……、やめた。

奴の目的が何にしろ、こちらの情報は出来るだけ流さない方がいいだろう。

火をもみ消しながらゆつくりと近づき、完全に煙を拡散させてから先ほど座っていたところに腰を下ろす。

分かつてはいるが一応聞いておこう。念には念を入れ、筆談で。

どうなりました？

「その前にちよつといいかい？」

ドクターに遮られた。

「実は一つ詫びなければならぬことがあってね。通気口の人物、僕の手の者なんだ。すまないね。あー、怒らないでくれよ？ これを機に管理局とは手を切るつもりだったんだから、逃走時の保険だよ？ 保険！ 誰かを暗殺しようとかはぜんぜん思ってたんだから」

じゃあなんだ。俺のあの思考は全部無駄だったワケだ。
ハハッ、こやつめ。ハハッ

中将とオーリスさんの顔が面白いことになっているが、触らぬ神に祟りなしということで放置。

「と、いうわけで、君もこちらに来なさい。ドゥーエ」

ドクターが声をかけた瞬間、

ガタンッ

ズリ……ズリ……

と音を立てながら移動し始めるドゥーエと呼ばれた人物。

部屋の反対側まで移動すると、点検用のハッチが開いてそこからキレイなおみ足がスルリと出てきた。そして、出てきたのはウーノさん並みの美女だった。

（あーなんだ、ドクターは美人を囲う趣味でもあるのか？）

一人に集中してしまった為、ゴスベル絶対聖域によって様々な情報が流れ込んでくる。身長、体重はもちろんのことスリーサイズまで。やっべ、鼻血出そう……。

ボケツと見つめていると、件の美人さんに声をかけられた。

「あなたのお陰で煙草臭くなっちゃったじゃない！ どうしてくれるのよ!？」

これに対して俺は、

「び、美人さんの匂いはとてもいいです!」

と口走ってしまった。

うん、若気の至りだね。

俺の言葉を理解したのか、胸を張って凜としていた彼女は途端に赤面して俯いてしまう。そして呟くようにこう言った。

「あ、ありがとう……」

ア、アカン！ クールビューティー風が一気に赤面モジモジっ子

になるギャップがたまらん。

これは脈ありですよ！？ 誘ってもいいんですよ！？ むしろ誘われてるんですよ！？ ありがとう！ ありがとう！！ 今晩俺は男の子から男に進化します！！

「美しい人、今晚食事でもドンガツ！？」

最後の記憶は、オーリスさんのキレイな回し蹴りだった。

ソファアの向こうに落ちて気を失う前に二言三言話したらいいのだが、残念ながら覚えていない。辛うじて覚えているのは『白』『紐』『三角』の単語だけだった。

あの後には俺抜きで話が進んだ。結果は以下のとおり。

一、最高評議会のヒモ付き違法研究者は、司法取引でこちらになびくなら身分を保証して取り込む。従わないならターミネイト。

一、こちらの指定した研究を推進し、違法性がなければ個人の研究も許可。また、有益であると判明すれば補助、支援をする。

一、俺の同意を持って部隊を新設。最初の規模は小隊クラス。隊長は俺。魔導鎧まどうアーマーを主装備とし、その実用化を目指す。同時に魔導まどうアーマー鎧の戦術を研究する。

これらの三点だ。

三つ目の案件については暫く悩んだ後同意した。

特に理由はないが、強いて言うなら俺は美人に弱いということだろう。オーリスさんに頼まれたら断れないということだ。男として正しい反応だと思う。

こうして俺は小さいながらも部隊を持つこととなった。

16 暴走する思考（後書き）

また後半がグダグダになった。

反省も後悔もしているが修正でいいない。

予定では次でSttS前の話はラスト。

次投稿したら暫く間をおくと思います。ご了承ください。

17 汁気と母性と天然（前書き）

一ヶ月ほど空いてしまつて申し訳ありません。

普通なら理由を並べて謝罪するところだけど、理由らしい理由がないので弁明すら出来ません。

だからゴメンナサイとしか言えません。

本当にゴメンナサイ。

サブタイが卑猥でゴメンナサイ。

17 汁気と母性と天然

早いもので、俺が入局して一年と少しが経過した。

この一年は非常に濃いものだったといまさらながらに思う。

左腕を切り落とされたことに始まり、書類一枚で改革しちゃった
り、おっさん達の陰謀に巻き込まれるなど、一つ一つ数えたら両手
はでは収まらないだろう。それ故にストレスは半端ない。笑顔で鼻
血を出すなんてこともあったぐらいだ。

そして、現在進行形で目に毒な光景が繰り広げられていた。

「ゼストオ……。よく生きていた……。俺は、俺は……」

「レジアス、大の男が泣くな！ みつともない……」

おっさん二人がハグして泣いている。

死んだと思っていた親友が生きていたのだから嬉しいのは分かる
が、そういうことは個人的にしてくれ。スクリーン越しなら感動物
かもしれないが、直接目の前で見せつけられるのは正直言って拷問
だ。重ねて言う。他所でやれ。

そしてもう一組。

「うおおお！ クイント！ クイント！ クイントオオオ！！」

「ゲンヤさん！ うるさいわ！ ああ、ギンガにスバル、大きく

なつたわねえ」

「お母さん……」「おがあざああああん」

押しのけられるゲンヤのおっさん。うるさいと一喝し、旦那よりも娘達を抱きしめるクイントさん。母に抱きしめられ、静かに涙する姉のギンガに3歳児並の号泣をかます妹のスバル。傍から見ると母と娘達の涙の再会に水を差すおっさんに見えなくもない。娘達の側から三人を抱きしめようとするとクイントさんの裏拳に迎撃され、クイントさんの後ろから抱きしめようとすると今度は足が動く。結果、三人の周りを衛星の様にグルグル回りながら「クイントクイント」叫ぶしかない。そんな哀れな男、ゲンヤ・ナカジマに幸あれ。それにしてもスバルって子、あんなにわんわん泣いていて本当に14歳なのだろうか。しかもクイントさんの大きい母性にかぶりつくように顔を埋めて。なんと羨ま——、ゲフンゲフン、——なんと微笑ましい光景なのだろう。出来れば俺も加えていただきたいものだ。

「……………」

オーケー、オーリスさんにドウエさん。とりあえず落ち着こうか。ほら、その手に握られている『人を殴ったら青痣では済まない』感じのバットを降ろして。

——よし、良い子だ。そしたらそろそろ仕事に戻りなさい。あんたたちそれほど暇じゃないでしょ？

ん？ 俺？ このカオスを治めないとイカンでしょうが。それとも俺の変わりにあの暑苦しいおっさんの間でもまれてみる？

「そ、そうだ！ 午後の会議の資料作らなくちゃ！」

「あ！　ドクターに渡すものがあるんだった！」

そう言っ、そそくさとドアの向うに姿を消す二人。

オーリスさんや、資料は昨日全部やったでしょうが。あと仮に今からやったとしたら到底間に合わんからね。

ドゥーエさんや、ス力さんと一緒に来てたのに渡すものがあるってのは苦しいよ。ちなみにス力さんはまだ部屋の隅にいるからね。

「あらあら。あの二人は別れも再会も騒がしいわねえ」

「ママ、ルーもだっこしてえ」

甘えんぼさんねと呟きながらルーテシアを抱き上げるメガーヌさん。その眼差し、その仕草、まさしく理想の母親そのものだ。

さらに、胸部に備わった偉大な母性とその存在を強調している。具体的に言つと抱きしめられたい。

勘違いするなよ？　劣情じゃなくて、純粋に”母親”というものを感じたいただけだからな？

「ねえ、まもる。そろそろこの事態を収拾したほうがいいんじゃないかな？」

「……感動の再会組はともかく、あの汁まみれのおっさんの間には入りたくない」

「そう言わずにさあ。ぶっちゃけ用事があるから早く済ませたいんだよね」

「じゃあスカさんがいきなよ」

「……放置の方向で」

「激しく同意」

結局、自体が収束するのに2時間近くかった。具体的に言えば、スバル嬢が泣きつかれて眠るまでにそれだけ時間を要したということだ。ちなみに、レジアス大將はゼストさんの鉄拳にて物理的に静かにさせられていた。

備考としてスカさんの用事は見事に潰れた。内容はウーノさんとお買い物デートだったらしい。

心にゆとりの出来たバカップルは、休憩時間すら逢引に使うほど豪胆な存在らしく、他にもいろいろやらかしているらしい。端的に言えば、一種の”名物”となっている。

スカさんの友人として、二人の関係は祝福すべきものだと思っている。

だが、心の奥底、本能とも呼べる部分がこう叫んでいる。

——リア充もげろ、と。

place なにかの跡地

とりあえず機密性の高い部屋に移動した。

理由はよく分からないが、物理的に隔離された部屋らしく出入り口は一つのみ。その癖ライフラインはしっかりとしており、その気なら一ヶ月は過ごせるよく分からない部屋だ。レジアス大将曰く、『先達の遺産であり汚点』らしい。

兎にも角にも、内緒話をするには最適な場所には違いない。まあ、唯一の欠点は薬品臭いことかな？

「さて、詳しく話を聞こうか」

一番初めに口を開いたのはゼストさんだ。

よく言えば誠実、悪く言えば堅物。よっ！ 武人！！ と呼びたくなる、そんな御仁だ。

向かいのソファアの中央に座り、こちらから見て左にクイントさん、右にメガー又さんがある。位置関係からしてこの人がリーダーなのだろう。

「そう急くな。ところでこの部屋は何処だか分かるか？」

「分かるわけなからう。こちらは数年の間管理局を離れていたのだぞ？」

クイントさんは頷き、メガーヌさんはあたりを見渡してあらあら言っている。

もしかしてこの人天然か？

「驚くなよ？——ここはかつて『最高評議会』と呼ばれていた部屋だ」

「んなつ！？ 貴様！ 俺たちを売るつもりか！？」

「慌てるな。俺は『かつて』と言った筈だ」

「……どういうことだ？」

訂正。

ゼストさんもちよつと天然が入っている。この分だと、クイントさんにも何かありそうだ。用心しなくては。

「簡潔に言えば、最高評議会はもう存在しない」

そう言いつつ微妙な顔になる大将。

そりゃそうだろう。どこかの主人公と激しい戦いの末に倒されたりしたわけではなく、書類決済でいつの間にかいなくなっていた、だからなあ。

ま、やったのは自分なんですがね。フヒヒ。

「詳しいことは俺にもわからん。気がついたら居なくなっていた、それだけしか言えん。詳しく聞きたいなら織部に聞け」

大將が顎で俺を指すと、スカさん以外の目線が一気に集まる。そしてその眼差しは説明を要求していた。

「——初めての方は初めまして。お久しぶりの方はこんにちは。地上本部の便利屋にしてレジアス大將の下僕部隊、『地上本部特殊装備運用実験戦技教導小隊』の隊長を務める織部まもる二等陸尉です。どうぞよろしくお願いします」

とりあえず、自己紹介から始めてみた。人にめんどくさいことを押し付けた大將にも毒を吐いておく。

「あ、ああ。——ゴホン。私は地上本部首都防衛隊所属、ゼスト・グランガイツ二等陸佐だ。こちらこそよろしく頼む。……ところでレジアス。疑問なんだが俺の、俺たちの階級と所属はどうなっているのだ？」

改めて名乗ったことで、自分がどのような立場なのか気になった様子。リーダー格のゼストが指摘したことで始めて思いついたのか、クイントさんとメガーヌさんの両名も心配顔だ。ついでにゲンヤのおっさんもワタワタしている。

「公式には八年前に行方不明、そしてその三年後に死亡扱いに変わった。よって二階級特進してゼストは准将、クイント・ナカジマとメガーヌ・アルピーノの両名は二佐となっている。地上本部首都防衛隊は再編済み。よって所属部隊はなし」

貴様達はすでに死んでいる。

シレットと言う大將に青筋を浮かべる三名。ゲンヤのおっさんは今にも怒りが噴火しそうに顔を赤らめているが、家族が関わるといってもこうなので無視。

「そう、か……。我らはすでに死んでいるのか……」

シユンとうなだれるゼストさん。なんというか妙に弱弱しい。

ジャンルで言うなら『漢の娘』といった感じだろうか？

いや、まて俺。変な分野を開拓するな。

「が、表向きには『とある無人世界で発見、保護』という形になる。当然死亡認定も撤回され二階級特進もなくなるが、定期昇進ということで復帰の際には一つ階級が上がってそれぞれ一佐、三佐となる。もちろんそのまま引退することも出来るが、そこはまあ各自の自由だな。私としては復帰してくれるのを望むが……」

要約すると『死んだ事実を否定する』ということですね。
常套手段です。わかります。

「平和のために働けるのなら是非もなし。俺は復帰に同意しよう。クイントもメガーヌもこれを期に引退しても良いぞ？」

「とりあえず私は復帰するわ。いつの間にか娘は大きくなって自立しちゃったし、旦那も老けちゃったから生きがいを探さないと」

「そうねえ、私も復帰することにするわ。引退して就職というのも良いけどお給金が多い方がいいものね」

老けたといわれた男が絶望しているけど、放置でいいだろう。ど

うせ後でラブラブに戻るだろうし。

「お三方の今後も大方決まったところで話を戻します。先ほど大將が述べたように最高評議会はすでに存在しません。経緯としては

」

背後に浮かぶ幽霊みたいなやつで紅！

「———つといった感じでいつの間にか死んでいました。…ああ、『死んでいた』という表現はちよつと違いますね。耐用年数を越え、異常にメンテナンス費用がかかる備品を『廃棄処分した』が正しいでしょうね」

「「「「「……「「「「」

復帰組の三人は分かるとして、なんで大將まで『おまえ、やり過ぎだろ……』みたいな顔してるんだよ！あとス力さんは笑うんじやねえ！！

「……ご質問は？」

もついい。めんどくせえ。

あんたらがそんな態度を取るなら他の仕事してやる。

あんたらと違っていろいろやることあるんだよ！ 装備研究とか戦術研究とか。しかもやつたらやつただけ増えるんだよ！ 粗を見つけては修正、向上したらさらに上が見えてくる。イタチごっこなんだよ。終わらねえーんだよ！

「……ご質問がないようなのでこれにて失礼します」

立ち上がり一礼。踵を返して出入り口に向かう。

止める者は居らず、ただただスカさんの押し殺した笑い声が響いていた。

あとで聞いた話によると、復帰三人組を仮死状態から戻したのはスカさんで、その際に次元刀から得た情報を活用したらしい。そのお陰か、八年間も死に損なっていた癖に超健康なんだとか。オマケに若干若返っているらしい。ゼストのおっさんはともかく美人二人はものすごく喜んでいたそうだ。

あと、ゼストのおっさんは肉体の損傷が激しかったから『レリツク』なるモノを埋め込んで補っているらしい。そのせいで魔力の出力が上がったので新しいデバイスが欲しいとスカさんが頼まれたら

しい。そして俺も巻き込まれた。まあ、試したいものがあつたから引き受けたんだけどね。

三人の新しい所属は部隊を新設して対処するらしい。

形だけの部隊長がレジアス・ゲイズ大将で、その下に実質部隊長で第一中隊隊長のゼスト・グランガイツ一等陸佐、第二中隊隊長のクイント・ナカジマ三等陸佐、支援中隊隊長のメガーヌ・アルピーノ三等陸佐が就くことになっている。そしてなぜか俺の小隊も中隊に拡大されて、第三中隊として組み込まれることがすでに確定しているそうだ。ついでに階級も一等陸尉に昇格するらしい。寝耳に水なことだったが、任務内容は変わらないそうなので、別段気にしないことにした。

ちなみに追加人員の大半が人造魔導士の被検体だったりス力さん子飼いの半分ロボツ娘^コだったりしたが、これも気にしないことにした。

ぶっちゃけ人の形しているから人扱いで良いんじゃない？ そう思った俺に間違いはないはずだ。—— たぶん、いや、恐らくきつと。

そんなこんなで半年後を目安に異動が決定した。

まだまだやることはたくさんある。項目が多すぎて半年じゃ絶対に消化しきれないと思うが、オーリスさんとかドゥーエさんとか巻き込めば何とかなるだろう。

まあ、とりあえず頑張りますか。

< 追記 >

八神はやて三等陸佐から、『部隊を新設するから参加してくれ』と要請とも命令ともとれるメールを受けとった。

何処で知ったのかは分らないが、プライベート端末に直ちよくできたので怖かった。しかも高町なのは一等空尉とフェイト・T・ハラオウン執務官も同じような内容で送ってきたのでさらに恐怖が煽られた。

返事をしなかったらそれはそれで恐ろしい事態になる予感があったので一応した。言うまでもなくそれらを送信したあとに、プライベート端末を物理的に破棄した。

とりあえず一安心——かな？

ちなみに返信内容は、

前略

中略

後略

結論：拒否

と、簡潔にまとめておいた。

17 汁気と母性と天然（後書き）

とりあえず一区切りだと思えます。

このあと閑話？ みたいなのを挟んでゆつくり更新していきたいと思えます。あせらずじっくり、週一で更新できたらいいなあ。と思っています。

あとレジアスがいつの間にか大将になっていますが、気にしないでいてくれるとありがたいです。

ではこの辺で……

18 チートな存在とまもるの受難（前書き）

遅くなりました。

どうでもいいですが、学園黙示録がエロオモシロイです。
アニメはちょっと微妙かな？

18 チートな存在とまもるの受難

突然だがマイホームを購入した。

ちよつと郊外で交通の便がよろしくないが、海を臨むその景觀は気に入っている。というより、それが決め手で購入に踏み切った。玄關出たら5分で釣り場なので食費にも貢献してくれるだろう。

ちなみに土地代+新築費用に関しては12年ローンを組ませてもらった。

返済にはスカさん達と共同開発したもののパテント料をあて、さらに給料の3割を回すことで短期間返済実現している。おおよそ三年後に退役して給料が下がっても、25年以内にはパテント料だけで返済できるので安心だ。

頭金は自分で用意したので、一年半の間に強制貯金してきた金が一気に吹っ飛んだ。キレイサッパリ過ぎていつそ清々しい。頼る親兄弟がいらないというのはこういうときに困るな、とはレジアス大將の言である。俺としては元からいないから別に気にならないのだが……。

まあ、とにかく家を買ったわけだ。

これで俺も一国一城の主！ 着工は来月末！ そして完成は半年後だ！

ああ、楽しみで仕方がない。

ゼスト隊三人の復帰から半年、マイホーム購入から一月の月日が流れた。

レジラス大將率いる新設部隊、『地上本部特殊装備運用部隊』、通称『特装隊』は無事に稼動し、着々と戦果を上げている。あまりに順調すぎた為、密談から4カ月後に俺の小隊も組み込まれたほどだ。そのアホみたいな勢いに、ミッドチルダに存在するテロ集団や犯罪組織は日々を戦々恐々と過ごしているらしい。

個人単位でも恐ろしいことになっている。

スカさんと俺で作り上げたデバイス、『魔力を注ぐと膨張する金属』を用いた『ばっさいそう拔塞槍』を使用するゼストのおっさんはその最たる者だろう。部隊を率いる意味がないほどの活躍なのだ。

この場合、『一騎当千』や『獅子奮迅』と言い表すのが一般的なのだろうが、俺から見れば『一人攻城兵器』、もしくは『戻れる特攻兵器』と云わざるを得ない。戦闘方法が『巨大な槍を形作って直上から呐喊、粉碎する』だからだ。

実際見たときはおつたまげた。確かに「要塞を指し抜く槍」という意味を持たせて命名したが、本当に実行するとは思わなかったからだ。市街地ではもちろんのこと、郊外でも滅多に使えないため、レジラス大將預かりの封印という運びになったことを本人はひどく残念がっていた。しかし、切り札としては最上だろう。

実はクイントさんにもデバイスを配布している。理由はギンガ嬢とスバル嬢それぞれにデバイスを譲渡してしまっていたからだ。た

だし、こちらはゼストのおっさんのようなキチガイデバイスではなく、以前のものを解析・強化したもので、ついなので新式の魔導^{まどう}鎧^{よろい}のテストももらっている。

簡単に言えば「近接戦闘に特化した魔導鎧^{まどうアーマー}」をコンセプトにしたプランで、用途や好みに応じて『魔力刃発生装置』や『ナックルガイド力場発生装置』などの装備を付け替えること主目的にしている。クイントさんに提供したのはそのうちの一つ、『タービン型衝撃収束装置』というもので、ぶっちゃけるとまんまりボルバーナックルの廉価版だ。ただし頑丈さはオリジナルを超える。

しかし、モノは普通なのに使い方は非常識だった。こちらとしては一撃が非常に重くなる装備にして、相手の攻撃はバディが引き受けるツーマンセルの装備として考案したのだが、あるうことが回転したタービンで攻撃をはじく、——中国拳法で言うところの『化勁^{かけい}』をいきなり”実戦”で使い始めやがった。「頑丈だからイケルと思った」と本人は語るが、想定外のことでは責任をもてないのでキツチリ説教した。しかし効果はなかった。拳句に脚にも付けてくれと言っから始末に負えない。断ったのだが趣味人なMAD供が一晩でやらかしてくれました。

お前は何処のスーパーロボットだよ！ と皮肉った翌日、訓練場で四肢のタービンから雷つばいなかで範囲攻撃をするクイントさんがいた。もうどうでもいい、俺は知らん。

メガーヌさんにも協力してもらっている。といっても、すでに形になってる物の評価試験に参加してもらっているだけであり、決して前者二名のような事態にはなっていない。さらに言えば、性能はすでに立証済みで着心地や耐用期間などを調査するだけでなんら危険はない。そもそも召喚魔導士に敵の接近を許すなど言語道断なのでバリアジャケットの有用性は低い。だから着心地、ファッション性などを評価してもらっわけだ。ちなみに俺はこちらにはノータッチで、どんなものになるかは皆目見当がつかない。女性陣と一部

の男性職員に丸投げさせてもらった。

掻い摘んで言うとな俺にセンスを求めるのは無謀だ。

俺も絶好調だ。といっても、キチガイな戦果を上げる二人には遠く及ばず、一般隊士と比べたら成績優秀、みたいな感じだ。

最近ではパラディンも使っておらず、もっぱら部隊指揮と装備開発に力を注いでいる。

『豪快』のゼスト、『弾丸』のクイント、『艶姿』のメガース、『地味』のマモルと揶揄されるほどに、隊長陣の中では一番目立ってない。ま、目立ったから給料が上がるなんてことはないし、危険も少ないからいいんだけどね。

でも、一つ問題がある。

隊長陣の温度差に漬け込んで、ゼストのおっさんみたいなベテランと、俺のような若手を対立させようと画策している輩がいるようだ。十中八九、「海」と「空」の本局連中だと思いが勘違いも甚だしい。

確かに温度差はある。が、それはただのメンタル的なもので任務に励む姿勢は変わらないのだ。言うなれば、暴走しがちなベテランとそれをたしなめる若手、というのが一番しっくりくる。普通逆だろ？ と思われるかもしれないが、隊長がアレだから仕方がない。とにかく、見た目ほど我ら『特装隊』の仲は悪くないのだ。

ああ、そうだ。

この対立（笑）の構図を利用して一芝居打つか。そうとなれば早速大将に連絡しなくては――。

side 本局有力者の集い

薄暗い会議室に、次元航行部隊と航空武装隊の高官が集まっていた。

彼等は副官を伴わず、ここに到着してから提供された報告書を熱心に読んでいた。ある者は情報の真偽が図れず困惑し、ある者は情報を鵜呑みにして憤る。そして良識ある者は、また平和に近づいたと顔をほころばせた。

彼らが手にしている報告書には、『地上本部の増長と対策』と銘打たれていた。

「さて、大方の整理は付いたはずです。率直な意見を聞かせてもらいましょう」

薄暗いの一室、さらに薄暗く感じるところにいる女性から声上がる。それに呼応するかのようにざわめきが広がり、小声が普通の声に変わる頃、一人の若い提督が声高に発言した。

「これは明らかに過剰戦力だ！」

たった一言。それだけで十分だった。この提督の不用意な発言により会議は白熱、対策を練っているはずなのに、陸上本部をどのように処罰するのか、資金をどのように吸収するのか、優秀な局員を

どのように配置するのか、そんな絵に描いた餅をどのように切り分けるに焦点が集まっていた。

その一方、白熱する彼らとは対照的に冷静な者達もいた。しかしその数は少なく、レオーネ・フィルス法務顧問相談役、ラルゴ・キール武装隊榮譽元帥、ミゼット・クローベル本局統幕議長の「伝説の三提督」と呼ばれる三人と、現場からの叩上げで今の地位にいるごく僅かな良識的な将官数人だけだった。

この会議は数時間にもおよび、最終的に「ベテラン組のレジラス・ゲイズと、新進の織部まもるの不仲を煽って内部分裂を誘発し、瓦解した所で各自で行動」という、会議する意味があったのか？と疑問を持たざるを得ない結果に終わった。唯一の成果は、地上本部が勢いづいてきたという共通の認識をもてたことだろう。

他にも「レリック」というロストログアを専任で追いかける『古代遺物管理部機動六課』の設立について触れたのだが、三年前から協議を重ねて設立については合意に至っているので問題なし、ということでは捨て置かれた。

しかし彼等は気がつかなかった。機動六課の案件の中に、誰も意図しない爆弾が忍び込んでいることに……。

ちなみに、会議の内容は潜伏していたドゥーエによって、余すところなく地上本部側に伝わっていた。つまりこの会議は全て無駄だったのである。

side 技術集団『リミット・レギュリティ』

「さて諸君。我々の短いようで長く、それでいてやっぱり短い研究も今日で一先ず一区切りだ。ご苦労様」

集まった面々を労ったのは、今回の集会の主催であり、技術集団『リミット・レギュリティ』のリーダーでもあるジェイル・スカリエッティ——現在、ジェイク・スカリエリの偽名で技術一佐の地位にある男だ。

「そして喜べ！ 仮称・魔導鎧バージョン3の正式リリースをもつて個人研究が解禁される！！」

一部を除き立ち上がり、雄たけびを上げ全身で喜びを表現するレギュリティ所属の研究者たち。
「一部を除き立ち上がり、雄たけびを上げ全身で喜びを表現するレギュリティ所属の研究者たち。」

「では、このプロジェクトの発案者にして全ての火付け人である、織部までも一等陸尉のお言葉を賜ろう」

仰々しい口調のジェイルからマイクを受け取り、襟元を正してあたりを見渡すまもる。そこかしこから「引っ込めエリート！」だとか「この破壊魔！」とかの悪口が上がる。18歳の若さで一等陸尉

であり、最高評議会と違法研究者たちのある意味マッチポンプという関係を壊した張本人であるため、あながち間違いとも言えず、それ故に否定できない。もちろん、彼らも本気で言ったわけではなく、まもる自身も冗談だと理解している為、特に軋轢は生じなかった。

「とりあえずご苦勞様。本プロジェクトはこれにて一旦終了、一月の準備期間を経て、地上本部の研究機関として再スタートを切ります。その一ヶ月間は自由！ 辞表を書いて辞めるもよし！ 他場所に異動するもよし！ そして当然個人研究もよしだ！」

ここでまた歓声が上がる。

まもるはここから離れて生きることできると示唆しているのだが誰も聞いていない。いや、始めから回答など出ているのだ。

彼等は生粋の研究者であり、そのほとんどが犯罪者で括られていた人間だ。一般に降っては最新の研究や技術にはありつけないし、「海」や「空」では肩身が狭すぎて自由に出来ない。それに対して「陸」はある程度の自由が利き、さらに好きに動くことが出来る。犬に例えるなら保健所のケージで飼い殺されるのと、短いリードで決まったコースしか散歩させない飼い主、毎日ドッグランに連れて行く飼い主のうちから生きる場所を一つ選べと言っているようなものだ。犬に人間並みの知性があるのならば保健所は論外だし、リードの短い飼い主は出来れば遠慮したいだろう。必然的に、範囲は限られるがドッグランで自由に走り回れる飼い主を選ぶことになる。

「ただし！ 違法行為は絶対にするな！」

そしてこれが絶対にして唯一の『柵』だ。

一般では道徳観、研究者には倫理観とも取れる、最初は越え難く、一度越えてしまえば次からは異様に低くなる特性を持った『柵』だ。彼等は一度それを越えている為ここで釘を刺しておかなければなら

ないのだ。

「今度やらかしたらさすがに庇いきれません。むしろ率先してブタ箱にぶち込みます。当然、司法取引をしたという事実も加味されるので裁判では不利、というより開廷したら即判決もありえますので胆に銘じておいてください。何もない牢獄は寂しいですからね」

言外に、「度を越えたら研究が出来ないところに押し込むのでヨロシク」と伝えているのだ。

ＬＬの研究バカにとってまもるの言葉は非常に重く、その証拠にヘラヘラしているジェイル以外、一様に黙り込んでしまう。

「ハハハ。つまり、織部一等陸尉が言いたいことは『一線を越えなければご自由に』、もしくは『ヤバイなと思ったら相談を』ってところかな？」

そう、まもるは低くなって飛び越えやすくなった『柵』の向うに分かりやすく、それでいて彼らにとってこの上ない『地獄』を用意することで、相対的に『柵』の効果を上げようとしたのだ。

一人一人が真意に気付いて、己自身のために『柵』を作るのが一番望ましいが、今回はジェイルの一言で全員気がついてしまった。まあ、全員が同じ認識をすることで集団に秩序が生まれ、それが転じて集団に掟という『柵』が出来上がったのは結果オーライであろう。

「あー……、まあ、なんですかね。とにかく自分をしっかり制御してください。以上、挨拶終わり」

ジェイルのせいで道化になってしまったまもるは、いたたまれなくなり早々に挨拶を切り上げた。

「では！ さつさと仮称・魔導鎧まどうアーマーバージョン3の正式名称を決めて至福のときに備えようではないか！！」

名前を付ければ晴れて完成。だがそれがなかなか決まらない。ほぼ全員が開発に関わったため思い入れがあり、それ故に各々が勝手に名前を付けて呼んでいるのが現状だからだ。

開発コードである『魔導鎧まどうアーマー』をそのまま使う人がいれば、隊士服に酷似した外見を指して『強化隊士服』や『装甲隊士服』と呼ぶものもいた。バリアジャケットの代わりの役割もこなすから『バリアアーマー』、長い方がカッコイイからというくだらない理由で『着衣式特殊魔導兵装基本装備？型』と呼ぶ人もいた。
とにかく纏まらないのだ。

紛糾する狂科学者達を横目に、まもるは一人でウーノの入れてくれたコーヒーをすすりながら考えていた。

——俺がここにいる意味はあるのだろうか？ と——

「もう」Sスーツでいいじゃん」

「『『『それはいろいろダメだ!!』』』」

全員にダメ出しをくらったジェイルは涙目になった。それを見ていたウーノがさかさずフロアを入れる。

言葉を交わさず目と目で通じ合う二人を見るのは、一人身には非常に目に毒な光景だった。

「一等陸尉、こちらへ……」

ジェイルの傍から連れ出されたまもるを確認すると、一人の研究者がボタンを押す。

すると静かに壁がせり上がってきて二人とその他を隔離した。

「普段は尊敬できる科学者なんですけど、あの二人はああなると仕事をしないんですよ。さらに醸し出すラブラブムードは周囲に多大な影響を与えるので隔離するんです」

毎度のことですがねとまとめ、まもるを連れ出した研究者は去っていった。これから改めて名称決めに参加するらしい。

（尊敬……ねえ……）

『もげる』や『爆発しろ』と書かれた隔離壁を見つつ、まもるはコーヒーを飲もうとした。しかしすでに飲み干していた。

（仕方がない。廊下の自販機に行こう）

別に静かにする必要はないので普通に席を立ち、普通にドアを開けた。一応会議中の退室になるため咎められるかな？　と案じたまもるだったが、誰一人としてまもるの退室に気が付かなかった。

『地味』という言葉が頭の中にリフレインし、少し悲しくなったまもるであった。

18 チートな存在とまもるの受難（後書き）

今回は分かりやすいフラグを投下しました。チェーンソーが似合うマツチヨメンが四人呼んでいたら、「フラグ！」「フラグ！」と一斉に叫んだことでしょう。

というか自分の伏線張りがヘタすぎて悶絶する。

自分のヘタレ具合はともかく、まじつアーマー魔導鎧の新しい名前を募集します。感想でご応募ください。

寄せられた中から私が独断と偏見で選びます。賞品はありません。応募がなければ、魔導鎧のままでいくか適当に名付けますので悪しからず。

<魔導鎧>

背中に着脱型の大型カートリッジ、腰部に緊急用の小型カートリッジ×2がある。体の各所にハードポイントが設置されている。対刃対弾対魔力の特殊繊維で作成されており、通常時でもそれなりの防御力があるが、バリアジャケットには及ばない。魔力を通すと色が変わる。普通の隊士服としても使用できるようにあえて外見を似せている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2271/>

魔法少女リリカルなのは StS ~ 白い甲冑が往く ~

2010年10月9日23時43分発行